

# 九州大学 経済学部 同窓会報 第49号

九州大学経済学部同窓会  
事務局 〒812-8581  
福岡市東区箱崎6-19-1  
九州大学経済学部内  
TEL&FAX 092-642-2442  
mail to:dosokai@en.kyushu-u.ac.jp  
郵便振替 01750-6-21743

## 目次

## Contents

平成22・23年度行事予定(総会のご案内) / 1

## 訃報

渡邊 彦士氏 逝去

逢坂 充(昭和32年卒・昭和35年博士入) / 2

山崎 良也氏 逝去

山田 和敏(昭和58年博士入) / 3

支部だより 東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 5

関西支部 理事 片山 基之(昭和57年卒) / 6

福岡支部 事務局長 平井 彰(昭和55年卒) / 6

## 講演 記者席から見た日本経済の半世紀

朝日新聞社顧問 朝日新聞社元社長

箱島 信一氏(昭和37年卒) / 7

## 同窓生健筆模様

「リカードウ研究半世紀」

中村 廣治(昭和28年卒・昭和30年博士入) / 12

「マーシャル経済学研究」 岩下 伸朗(昭和60年博士入) / 15

「現代労働問題分析—労働社会の未来を拓くために—」

石井 まこと(平成2年卒・平成4年博士入) / 17

## 編集部よりのお知らせ / 18

## リレー随想

「戦中戦後の九大時代の思い出」

半田 博(昭和22年卒) / 19

「私が九大経済学部で学んだこと」

酒見辰三郎(昭和27年卒) / 20

「九友会のこと」 長尾 磯夫(昭和32年卒) / 21

「過去を振り返り、将来を想う」

菊池 武成(昭和38年卒・平成17年修士修了) / 25

「学生時代の思い出」 久保 隆二(昭和49年卒) / 27

「同期の同窓会「さよなら六本松」を振り返って」

中野 光男(昭和50年卒) / 28

「追憶：九大大学院で過ごした日々」

原 伸子(昭和52年博士入) / 30

「保険学講座の思い出」 小川 浩昭(旧教員) / 31

「博多の女のおもてなし～南蛮往来」

木林美津子(平成15年卒) / 32

「九大卒業生として」

小林 秀章(平成18年卒) / 34

## 一読千金

「ASEAN経済共同体—東アジア統合の核となりうるか—」

清水 一史(現教員・同窓会理事) / 35

## 経済学研究院教員一覧 / 37

## 経済学部名誉教授の会 / 38

## 人物往来～新教員紹介

永田 晃也・大西 俊郎・小野 廣隆 / 38

儲 梅芬・木成 勇介 / 40

## 国際学術交流振興基金執行状況報告(平成21年度)

九州大学大学院経済学研究院教授 大住 圭介 / 41

## 平成21年度卒業生就職状況 / 42

## 平成21年度決算報告 / 43

## 同窓会会則 / 44

## 同窓会役員名簿・歴代会長 / 46

## 同窓会費納入のお願い / 48

## 平成22、23年度行事予定(総会のご案内)

平成22、23年度の各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

### 平成22年度広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成22年11月26日(金) 18時30分～

場所 ANAクラウンプラザホテル広島

(広島市中区中町7-20)

TEL (082) 241-1111)

&lt;お問い合わせ先&gt;

広島地区九大法・経同窓会事務局 藤森 誠

中国電力(株) 販売事業本部気付

TEL (050) 5521-0427

E-mail 278828@pnet.energia.co.jp

### 平成23年度関西支部総会

日時 平成23年2月19日(土) 15時～

場所 大阪弥生会館

(大阪市北区芝田2-4-53)

TEL (06) 6373-1841)

&lt;お問い合わせ先&gt; 関西支部事務局 中野 光男

富士精版印刷株式会社管理本部 気付

TEL (06) 6394-1182

E-mail m-nakano@fujiseihan.co.jp

### 平成23年度福岡支部総会

日時 平成23年6月3日(金) 18時～

場所 博多都ホテル

(福岡市博多区博多駅東2-1-1)

TEL (092) 441-3111)

&lt;お問い合わせ先&gt; 福岡支部事務局 平井 彰

(社)九州経済連合会内 TEL (092) 761-4261

E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

### 平成23年度 東京支部総会

日時 平成23年7月7日(木) 18時～20時50分

場所 学士会館 210号室(予定)

(東京都千代田区神田錦町3-28)

TEL (03) 3292-5936)

&lt;お問い合わせ先&gt; 東京支部事務局 吉元 利行

株式会社オリオン総合研究所

TEL (03) 5877-5590 (ダイヤルイン)

FAX (03) 5877-5859

E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)

t29yoshimoto@aol.com(自宅)

### 平成23年度広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成23年11月開催予定

場所 未定

## 第5代同窓会会長 渡邊彦士さんを偲ぶ



九州大学名誉教授 同窓会顧問

**逢坂 充氏**

1957(昭和32)年卒

1960(昭和35)年博士入

確か昨年も末の師走のある日、送られてきた同窓会報第47号を手にした私は、「渡邊彦士さんを偲んで」という石橋英治関西支部長の計報記事に接して、一瞬愕然として息を飲み、衿を正して目を閉じた。そして、お目にかかるというも感じていたことだが、渡邊さんの天真無垢で、いかにも童心に帰ったような澄み切った目と人なつこい笑顔が脳裡一杯に広がって離れなかった。

暫くして、私は石橋さんに電話を入れてお話をしたが、石橋さんもお逝去の報を一週間ほど後になって事務局長の中野光男さんから伺ったこと、そのため葬儀には参列できなかったことを大変悔やんでおられた。そして、昨年3月、クモ膜下出血により手術を受けられた後リハビリを続けておられたが、9月22日に急逝された、と伺った。私は石橋さんに、後日弔問に伺いたい旨をご遺族に伝えて下さるようお願いして電話を切った。

渡邊さんは、平成5年7月から同8年10月までの3年余の間第5代会長として、わが同窓会の活動に並々ならぬ情熱をもって取り組み、同窓会の活性化に力を尽くしてその発展に大きく貢献された。

その間私は、本部の事務局長として親しく会長にお仕えた関係から、渡邊さんのご冥福をお祈りするとともに、大変遅くなって恐縮ではあるが、この度改めて渡邊さんがわが同窓会の発展に寄与された偉大な功績を振り返りながら、謹んで哀悼の辞を捧げさせていただくことになった。

\* \* \*

渡邊さんが前の会長であった谷川大介さん(故人)の後を継いで関西支部から会長として推挙された経緯については、当時の支部長であった松浦正純さんと理事の田口広則さんの強い薦めがあったが、渡邊さんは当時関西地域で様々な団体の会長や役員を歴任して社会的にも活躍されていて、そうした行動力と厚い信望を承けてお二人が強く推薦し何度も交渉

されたと聞き及んでいた。

本年2月に開かれた関西支部総会の翌日に弔問に伺った私は、ご子息の渡邊高文さんから、父はなぜか環境や工学関係の団体から役員への依頼を受けていました、という話を伺った。

振り返ってみて私は、渡邊さんが当初からいかに行動の人であったかということ、いま改めて思い起こしている。というのも、渡邊さんは会長職を承諾すると直ちに自ら福岡と東京を訪れ、当時の大野茂福岡支部長(故人)と福岡道生東京支部長とに就任の挨拶だけでなく同窓会の組織や運営に関する意見交換の場を作られたが、じつはこの時私も渡邊さんに同道した思い出があるからだ。この行動力は、その後同窓会の活性化に欠かせない組織と運営の再構築へと結実することになる。この際紙面を少々借りて、渡邊さんの発議で改善された特筆すべき事績を二、三思いつくまま述べておきたい。

まず最も重要な改善策は、新たに常務理事会を設置したことが挙げられる。従来、同窓会の活動で、本部と東京・関西・福岡の三支部との交流や支部間相互の交流が組織運営上や、困難な点を改めて、本部と三支部の全体を一元的にカバーする組織体としての常務理事会を新設して、全国総会時に開催することになった。これによって、その後本部並びに各支部相互の緊密な交流と情報交換がスムーズに行われるようになって、今日に至っている。

第二に、これまで年1回発行の同窓会報を、同窓生の交歓の媒体紙として多彩な情報を楽しく読めるように刷新して、年2回の発行としたことも特筆されてよい。これ以降、会報はご承知のように、有能な編集者の隠れた努力とご苦勞によって年2回の発行を維持して益々充実し、今日広く愛読されるようになった。

その他にも種々の奨学金制度の創設が挙げられる。とくにこの時期、国際交流の進展によって留学生や海外渡航者が増えたのに対応して各種の支援制度を作り、それらは現在も有意義に活用されている。

さらにこの当時、九州大学は「センター・オブ・エクセレンス」を掲げて、世界的水準の教育・研究の拠点となる新しい大学づくりを構想していた。そ

して、そのためのキャンパス移転が大問題であったが、この時期は、福岡市西区の元岡地区、現在の伊都キャンパスに、全学統合型の移転先がやっと決まった頃であった。そんな時期、私は渡邊さんと度々、当時はまだ雑木林に蔽われた森と丘陵地が連なる広大な予定地に足を運んだものである。

そして、この予定地に出かける度に、渡邊さんは交通手段を始めインフラ整備がいかに重要かを強調して色々とアイデアを提案されていたが、そんななか、ある時、将来母校の新キャンパスが「センター・オブ・エクセレンス」となることを夢見ながら、新キャンパスを巡るモノレール建設というアイデアを情熱的に語られていたことが懐かしく思い出される。それは、JR筑肥線の周船寺駅から新キャンパスを通過して美しい景観の志摩半島を一周できるような観光も兼ねたモノレール建設の壮大な構想であった。じつはこのモノレールの話しは、前にも述べた弔問の際のご子息もご存知だったので、期せずして会話が弾んだりした。渡邊さんのこの夢が、いつの日か、完成した新キャンパスの偉容と並んで実現することを、いまは天国の渡邊さんとともに願ってやまない。

\* \* \*

今年の2月6日、前にも記したように、私は渡邊さんの弔問を兼ねて関西支部総会に出席した。じつは渡邊さんだけでなく、関西支部発足の当初から永く副支部長として尽力いただいた鶴喜久さんも昨年8月に他界されていたので、総会は、お二人のご冥福を祈り黙祷を捧げて始まった。鶴さんとは同期卒業の旧知の友人でもあったので、私にとって今回の総会は特別な思いを一層深くするものであった。

第1部の行事と第2部では箱島信一さんの経済記者から見た日本経済半世紀の諸相についての軽妙な講話を拝聴した後、第3部の懇親会に入って、恒例の「太鼓」の音がどどんと鳴り響くと会場が一気に盛り上がった。続いて司会者から、今回この「太鼓」は渡邊さんのご子息から関西支部に寄贈いただいた、という報告があった。これを聞いて私はふと、確か以前に渡邊さんから、「太鼓」は旧制五高の同窓会のために購入したと伺ったような気がしたことを思い出したが、いま「太鼓」の落ち着き先が決まったことで心中密かに安堵した。渡邊さんは旧制五高のご出身であり、恐らくこの同窓会にも「太鼓」を引っ提げて大いに活躍されていたに相違ない。

いま改めて上のように追想してくると、渡邊さんは行動の人であり、そしてアイデアマンでもあったが、また人を楽しませ己も楽しむ真のエンターテイナーでもあったように思われる。

懇親会は、その「太鼓」を同じ五高出身の棚倉亨理事が最後に打って宴を閉じる予定であったが、病軀を押して名古屋から駆けつけられた棚倉さんのご都合で、急遽代役となった福留久大名誉教授（本会報の編集長）が有終の一打を放ってずしんと鈍く響かせた。

その響きは、惜別と鎮魂とそして感謝の気持ちの絢い交ざった重たく沈んだ音色であったが、あの時天上の渡邊さんにも達したであろうか——そう思いながら、いまはただ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げるだけである。

## 故・山崎良也先生を偲んで



久留米大学経済学部教授

**山田 和敏氏**

1983(昭和58)年博士入

平成22年2月21日、山崎良也先生（九州大学名誉教授、九州産業大学元学長）は78歳の生涯を閉じられました。

数年前にお会いして歓談したときには、とてもお元気でいらっしゃったので、突然の訃報に接したときには言葉を失ってしまうほどでした。



山崎先生は長崎県諫早の御出身で、九州大学大学院経済学研究科を卒業されてから、西南学院大学、滋賀大学、熊本大学、佐賀大学、九州大学、そして、九州産業大学の各大学で教鞭を執られました。理論経済学（特に、経済成長論）が御専門で、あるとき、ゼミの時間に御自分で冗談交じりに「学会では、Mr. 加速度と呼ばれているんだ」と笑顔で話されていたのを覚えています。

さて、山崎先生との出会いは、私が佐賀大学経済



学部の学生だったときです。当時、先生は教授として、経済数学の講義を担当しておられました。数学に興味があった私は、すぐにその講義を受講しました。そして、先生の穏やかでわかりやすい講義に接し、3年次には山崎ゼミを選び、先生のゼミ生になることができました。先生の講義やゼミでの指導に感化された私は、ますます経済学に興味を持つようになり、次第に研究者になることを考えるようになっていきました。

3年生の終わりに先生の研究室に呼ばれ、進路についての指導を受けたときのことです。就職に関する質問に、私が戸惑いを覚えながらも「大学院への進学も考えています」と言うと、先生の顔つきが少し変わり、「大学院に進学できたとしても就職できるかどうかはわからないよ。君は長男ですか」と質問されました。よく意味がわからないまま、恐る恐る「次男です」と答えると、にっこり笑顔になられて、「じゃ、やってみなさい」と言っていただきました。長男だったなら反対されていたかもしれません。その後は、忙しい中、時間を割いていろいろと大学院受験の指導をやっていただき、先生のご指導のお陰で何とか九州大学大学院経済学研究科に合格することができました。そのとき、既に先生は九州大学に異動されておられましたので、もちろん迷わず大学院での指導教官をお願いすることにしました。

当時は経済工学科ができたばかりで、山崎先生も計量経済学講座に居られたこともあり、興味もあったので私は計量経済学の分野を専攻することに決めました。修士課程のころは、ゼミの報告は一人でやった方が勉強になるからと、ほぼ毎週一人で報告させられました。大変でしたが、そのときの計量経済学の知識が今の私の財産となっています。もちろん他の先生方（児玉正憲先生、武野秀樹先生、河野和正先生（教養部から出講）など）からも、いろいろと



昭和57～58年頃 熊本 水前寺

御指導いただきました。

院生時代の思い出は他にもたくさんあります。まず、大学院で先生の最初の門下生となれたことです。これは、私にとって幸運でした。先生も初弟子ということで、いろいろと御配慮くださいました。例えば、計算機はもっぱら大型計算機を利用していましたが、予算枠を気にせず自由に使うことができました（私は相当予算を使っていたと思います）。つぎに、修士論文作成時の思い出です。修論では簡単な日本のマクロ計量経済モデルを作成して、ある種の実証分析を始めたのですが、何せ初めてのことで計量モデルの推計がなかなか上手くいかず、毎日毎日、夕方に先生の研究室にその日の計算結果の報告に行き、先生の指導を受け、また、計算機室に戻り深夜まで計算するという日が続きました。先生は焦り気味だった私を見て、「勉強は楽しみながらやらないといけないよ」と言ってくださいました。その意味を、即座に理解することができたと思っています。先生は「気持ちを切り替えなさい。発想を転換して、気持ちを楽に持ちなさい」と、助言してくださいました。今でもこの言葉は、研究に行き詰ったときに私を助けてくれています。この言葉を思い出すと、辛いときでも、何故か「もう一度、やってみよう」という気持ちが湧いてきます。これは私の宝物です。やっとのことで、マクロ計量モデルの満足できる推計結果が得られたとき、直ちに先生の研究室に駆け込みプリントアウトした計算結果を机の上に広げて御目にかけると、先生は我が事のように喜んで下さったことも、良き思い出となっています。

先生は常に学生に思いやりのある態度で接しておられました。先生に接した者は、おそらく誰もがそう感じたことと思います。私は修士1年のときに父を亡くしましたが、そのときには、先生はとても心配して優しく微笑みながら「これからは、勉強以外の



昭和57～58年頃 熊本 阿蘇

ことも教えないといけなくなったね」と言葉を掛けてくださいました。落胆していた私に「父親代わりになってあげるよ」と言ってくださったような気がして、大変ありがたかったことを鮮明に覚えています。その言葉に甘えて、山崎先生御夫妻には結婚の際の仲人にもなっていました。

思い出を書き出せばもっともっとたくさんありますが、とにかく、私にとっては最高の恩師であり、山崎先生との出会いが無ければ、今の自分は存在していません。何も恩返しが出来ないうちに、先生は

逝ってしまわれました。ただただ残念でありませんが、いまは心より先生の御冥福を祈るしかありません。安らかにお眠りください。

最後になりましたが、平成22年3月16日付で、山崎先生は瑞寶中綬章を受賞されました。生前の叙勲は叶いませんでしたが、関係者の御努力で勲章を受章されたことは、偏に先生の研究・教育の業績、社会貢献、そして人徳のなせるものと感じております。門下生の一人として、受賞を心より喜び申し上げる次第です。

# 支部だより

## 東京支部

### 1、理事会の活動

平成22年5月27日午後7時から学士会館にて、理事会を開催。

池田支部長以下合計13名の理事が出席して、以下を協議した。

○平成22年度7月総会について

- ・基本スケジュールの確認
- ・平成21年度活動報告案と平成22年度活動計画案について
- ・平成21年度収支報告案と平成22年度予算案について
- ・役員 の 退任 と 新任候補者について
- ・総会及び懇親会の運営方法について

### 2、支部総会

#### ①支部総会

平成22年7月7日午後6時から学士会館にて開催。

平成21年度活動報告案と平成22年度活動計画案、平成21年度収支報告案と平成22年度予算案のご承認をいただき、役員については、元支部長で顧問の有吉孝一氏（昭和34年卒）、及び理事森永隆氏（平成4年卒）の退任と平成21年修士卒伊藤健司氏の理事就任の了承を得た。

#### ②記念講演

今年は、朝日新聞社元社長（現顧問）箱島信一氏（昭和37年ご卒業）から「ニュースとともに50年～ニュースとは何か。メディアリテラシーとメディアの将来」と題して記念講演をいただき、満席となる好評であった。

（ご講演内容は、東京支部HPに掲載しておりますので、聞き逃された方は是非お読みください）。

#### ③懇親会

懇親会には100名を超える出席者があり、来賓の経済学部現役の先生方、名誉教授の方々と出席者が各出身地別の卓に分かれて、近況を報告するテーブルスピーチ方式で行われた。初めての参加や同級生でのまとめでの参加などもあり、大いに話が盛り上がっていました。

### 3、その他の活動状況

#### ①九大東京同窓会「ビアパーティ」

毎年恒例になった九大東京同窓会主催の「ビアパーティ」（8月27日開催）に今年も参加を事務局として呼びかけました。

会場は学士会館の201号室202号室とその間のホールを利用して、全学部からの参加者約300名で埋まり、経済学部からは約40名の参加でした。

なお、来年1月19日水曜日午後6時30分から学士会館において賀詞交歓会を開催いたします。

#### ②その他

- ・全国総会・福岡支部総会への出席（6月4日）
- ・九大東京同窓会理事会への出席（6月24日）

【東京支部事務局長 吉元 利行 1978(昭和53)年卒】

## 関西支部

### 好天に恵まれ、「堺まちあるき」に28名が集う

関西支部恒例の見学会が去る7月10日（土）に開催されました。今回の企画は「堺エコ観光ウォーク」。昭和32年卒の戸次（べっき）先輩や宮地先輩を筆頭に同窓生総勢26名+同伴者2名が、梅雨明け間近、強い日差しのもと暑さを気にしながら、皆さん元気に、歴史を感じる堺の町並みを堪能しました。

午前10時、JR阪和線百舌鳥駅に集合。地元堺市観光協会からお二人のボランティアガイドのご協力を得て、見学会はスタートしました。

まずは堺市博物館をじっくり見学した後、世界文化遺産国内候補「暫定リスト」入りし、歴史の教科書でお馴染みの仁徳陵古墳、続いて伝説の徳川家康の墓所があることで有名な(?)南宗(なんしゅう)寺のほか、千利休屋敷跡や最近評価が高まった歌人・与謝野晶子の生家跡などを訪ね、最後に海の神様として知られる開口(あぐち)神社に参詣しました。

昨年転勤で大阪生活を始めた小生はもちろん、関西在住が長い先輩方でも堺の町をじっくり見学するのは珍しいことらしく、各立ち寄り先では皆、ガイドさんの丁寧な説明に聴き入っていました。



見学会の締めくくりは、堺東駅前のレストランに場所を移し懇親会。石橋支部長の乾杯音頭の下、お世話になったガイドさんにも加わって頂きました。皆汗拭きタオルをグラスに持ち替えて、終始なごやかな雰囲気の中、諸先輩方と交流を深めることができました。

最後に見学会の準備と当日の運営にご尽力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、残念ながら今回参加できなかつた、同窓生各位も含め、



関西支部の諸行事にぜひ参加いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

【関西支部理事 片山 基之 1982(昭和57)年卒】

## 福岡支部

### 光富彰新副支部長を選任～平成22年度全国・福岡支部合同総会開催

2年に1度全国との合同開催となる平成22年度の支部総会を6月4日（金）、福岡市・博多都ホテルにおいて開催した。当日は来賓として法科大学院の赤松秀岳副院長を迎え、池田弘一同窓会長（東京支部長）、石橋英治関西支部長をはじめとする東京・関西両支部役員、貫正義福岡支部長をはじめとする福岡支部役員、並びに名誉教授の先生方、川波洋一経済学研究院長をはじめ現役の先生方、そして同窓生、さらに中国等からの留学生や在学生等々120名にご参加いただきました。

総会では、福岡支部副支部長として長年、支部並びに同窓会全体の運営にご尽力をいただいた右田喜章氏（昭和42年卒）が退任され、後任として光富彰氏（昭和51年卒）が新副支部長に選任されました。

当日は、川波洋一院長より、「九州大学大学院経済学研究院の現況と九大移転の現状」についての特別講演があり、経済学研究院の研究内容や学生の在籍状況等の説明、そして元岡地区への移転の状況、特に経済学研究院は平成29～30年度の移転の見通しで、全体の移転完了は平成31年度頃である、等のご説明をいただきました。

懇親パーティでは、来賓の方々や参加者のご紹介の後、池田同窓会長の乾杯の発声で懇談に移り、中国等からの留学生の紹介の後、学生歌「松原に」を全員で合唱して閉会しました。

なお、当日の様子は『九大広報第70号（2010.7）



～同窓会だより』でも紹介されました。

### 平成22年度評議員会（旧「理事会」）開催

平成22年度の評議員会を4月7日（水）、福岡市・九経連会議室において開催し、貫正義福岡支部長をはじめ17名の役員が出席しました。

当日は、平成21年度事業報告・決算報告、平成22年度事業計画（案）・収支予算（案）、役員改選（案）について審議し、原案通り可決されました。なお、全ての議案は上記総会において承認されました。

### 第48回交流ゴルフ会開催 次回は11月13日、筑紫丘GCにて開催

恒例の交流ゴルフ会を6月5日（土）、筑紫丘ゴルフクラブで開催しました。当日は4組14名（山本信三郎（昭和29年卒、以下同じ）、牛房良嗣（30）、麻生喜久男（35）、井上観光（35）、田中克佳（35）、鬼頭政行（45）、福田雅文（46）、坂梨正雄（50）、佐渡義夫（51）、工藤重之（52）、嘉村寿晃（54）、嶋田正明（54）、梅原晋（59）、黒木芳彦（平成13）の各氏）にご参加をいただきました。

なお、次回の交流ゴルフ会は11月13日（土）、筑紫丘ゴルフクラブにて開催予定です。登録会員の方々には別途個別にご案内いたしますが、当日の企画・運営は、ゴルフ会幹事の嶋田正明氏、坂梨正雄氏にお願いしております。

### アサヒビール博多工場見学会+アサヒビール園ジギスカン交流会開催

7月22日（木）夕方、アサヒビール博多工場見学



アサヒビール博多工場見学会

会並びに隣接のアサヒビール園でのジギスカン交流会を開催し、23名が参加しました。

博多工場は、もともと平日の昼間のみ工場見学を実施していますが、夏休み期間中は週に1回のペースで夜間も工場見学を受け付けており、環境に配慮したビールの生産工程について理解を深めた後、出来立てのビールを試飲。その後、隣接のアサヒビール園では23名の参加者による交流を深めました。



アサヒビール園ジギスカン交流会

【福岡支部事務局長 平井 彰 1980(昭和55)年卒】

## 講演

# 記者席から見た日本経済の半世紀



朝日新聞社顧問  
朝日新聞社元社長  
**箱島 信一**氏  
1962(昭和37)年卒

今日は大阪の同窓会にお招き頂き光栄に思っております。私はご紹介いただきましたよ

うに、昭和37年に経済学部を卒業いたしました。本来なら32年に入学いたしましたから、支部長の石橋さんや理事の山口さんと同じように36年に卒業しなければならないのですが、六本松の教養部のときに1年休学しましたので、37年の卒業になりました。1年落第したおかげで2つの学年年次から同窓会のご案内を頂いています。

私はずっと福岡市で育ちました。九大の箱崎キャ

ンパスと九大病院がある馬出キャンパスをつなぐ大学通りの中間に筥崎宮がありますが、私はその筥崎宮の2軒隣の実家で育ち、そこから九大に通いました。私の家は代々醤油醸造業をやっています、私が中学生のときに父が亡くなったこともあって、学生時代から慣れない商売をやっており、高校時代からずっと、跡取りになると考えていました。就職というプレッシャーがなかったから、大学で良い成績を取る必要もありませんでした。当時、安保反対の学生運動が盛んでしたが、デモに参加して警察に写真を取られても気にする必要はなく、誠にのんびりした学生生活を送っていました。

ところがのんびりと怠惰な生活を送っていた私に、ガクンとくるような事が起こりました。それは日本経済の高度成長です。私の家の醸造業は中小企業というより零細企業でありまして、従業員も10数人という小さな商売であります。昭和35年から高度成長が始まりますが、そんな小さな企業に就職する人がなくなりました。以前は求人紙の張り紙をすると次々に人が来たものですが、高度成長が始まるとピタリと人が来なくなりました。それで当時、赤坂門にあった職業安定所に日参しました。やっと人が来たなどと思ったら、実はそれは殺人犯で、後を追って来た刑事が私の家に来たところで手錠をかけるといった捕物劇さながらのこともありました。もはや家業の将来はないと思い、就職せざるを得ないと考えました。

そこで、九大時代に新聞部に入っていたこともあって新聞社にでも入ろうかということで、北は北海道新聞、南は西日本新聞まで、新聞社だけでなくテレビ会社や通信社まで願書を出して、まあ結果として朝日新聞に拾われたということでありまして。昭和36年という年は、大学卒業の就職が買い手市場から売り手市場に転換した年でした。したがって醤油屋の若旦那になるはずの進路を阻まれたのも高度成長だったし、なんとか新聞記者になれたのも高度成長のおかげでした。私なりに時代の波にもまれて、人生のスタートを切ったわけです。

朝日新聞に入ると地方の県庁所在地で4、5年、「雑巾がけ」をやらされます。まあ丁稚奉公みたいなものですが、私のスタートは福島でした。それから東京本社に転勤になり、1968年に経済記者になりました。1968年という年は、日本がGNP（国民総生産）で西ドイツを抜いて世界で2位になった年があります。新聞記者になったころは高度成長真っ只中のころで、1964年に日本がIMF（国際通貨基金）の8条国になり、さらにOECD（経済協力開

発機構）のメンバーにもなりました。つまり日本は世界の「金持ちクラブ」に入ることができたわけです。経済は伸びるのが当たり前という時代の中で、私は経済記者をやっていました。

当時は国際競争力をつけるために、企業の合併がやたらと多かったです。私が経済記者になった68年に、八幡製鉄と富士製鉄が合併して新日鉄が誕生しました。日商岩井など商社の合併もありました。新しい産業やビジネスも次々に起こってきました。企業はそれらに貪欲に手を出していく必要があるわけで、それまでの企業は名は体を表すということで何々製鉄や何々化学というのが普通でしたが、そのころから何をやってるか分からないという企業名がはまりました。表意文字の漢字よりカタカナの方が便利で、例えば東洋レーヨンが東レになるとか、オリコとかオリックス、さらに日本碍子も自動車部品や環境機器が主製品となり、日本ガイシと表記するようになりました。

それまで経済記者は新聞社の中では社会部記者が放蕩無頼を装うようなところがあったのに対しカバンを持ち、その中にいろんな統計資料や参考資料をたくさん入れているといういで立ちで少々アカデミックな雰囲気がありました。ところが高度成長の中で次から次へ経済ニュースが頻発するようになると、それまであまりしなかった夜討ち朝駆けを恒常的に行うようになりました。経済記者の社会部記者化などと言われたものです。

当時の経済部長が経済記者に期待するものは「一に体力、二に人柄、三、四がなく五にアタマだ」とよく言われました。高度成長真っ只中で日本全体が大いに高揚していた時代ですが、サラリーマンはライバル社を出し抜くためには命を張る、場合によっては犯罪行為も辞せずというような時代でした。いま考えてみますと、一種の「高度成長ラプソディー」といいますか、やや気違いじみた時代でした。これも日本経済発展のための一つのプロセスだったと思いますが、そういう状況をわれわれは批判的に取り上げ「くたばれGNP」という特集を書いたりしました。「くたばれGNP」とは、かつて大リーグでヤンキースがあまりに強すぎたため「くたばれヤンキース」という映画があって、そこからタイトルを頂戴したものです。当時、イギリスで知り合った貿易通産庁の役人から、「日本人のいうリセッション（景気後退）や日本経済のスランプなどというものは、われわれイギリス人から見ればブームなんだ」といわれたこともあります。いまGDP



(国内総生産)をテーマに特集を組むとすれば、「くたばれGDP」でなくて「がんばれGDP」ではないかと思いますが(笑)。そういう意味で、舞台が暗転したという気がします。

1964年に東京オリンピック、70年に大阪万博。それはまさに日本の高度成長を祝う打ち上げ花火ではなかったかと思います。そういう意味で60年代は非常に日本経済にとっては恵まれた「黄金の10年」でした。ところが70年代、80年代に入ると、そうはいかなくなってくる。外国から見ても日本経済は称賛の的だったのが、だんだん日本脅威論や警戒論が出てきます。さらに日本非難、日本バッシングが始まります。それは外からだけでなく、日本国内からも出てきました。学生運動が激しくなったのも70年代です。73年に水俣病訴訟の判決が出ますが、公害裁判はすべて企業側の敗訴に終わります。そのころ私は財界を担当していましたが、経団連や企業で一斉に共産党の機関紙「赤旗」の購読が始まったことも記憶しています。

外からのプレッシャーといいますと、71年は記憶に残る年でした。一つはドルショック、もう一つは日米繊維摩擦です。71年8月のドルショックは、ベトナム戦争でドルをたれ流したアメリカ経済の再生策としてニクソン大統領がドルを金と交換しないと一方的に宣言したことによって引き起こされたものです。賃金・物価の凍結や輸入に対しての課徴金の導入も同時に宣言しました。この3つはいずれも、特大級のニュースであります。この中で何が一番重大なニュースかといえば、いま考えれば金とドルの交換を断ち切ったことだということは当たり前の常識であり、今のリーマンショックに始まった世界経済の混迷の根源でもあります。

しかし、日本は貿易立国でありましたので、輸入課徴金を第一に取り上げた新聞もありました。いまから考えると、これは明らかに判断ミスですが、朝日新聞もこれを主見出しとしました。当時、ニクソンはドルと金の交換をしないのは「暫定的な措置」としてという言い方をしていたので、そこに判断ミスの原因があったという見方もできますが、いずれにしてもニュースの判断というのは非常に難しい問題です。学術的な論文ならゆっくり考える時間がありますが、新聞の場合は締め切り時間があるので、運動選手なみの反射神経が要求される。もちろん歴史的洞察力が肝心ですが、物差しをどこに置くかという新聞記者のニュースの価値判断は永遠の課題です。



ちなみにニューヨークタイムズなど多くのアメリカの新聞は、賃金・物価の凍結をトップに持っています。このように立場によってニュースの大小は変わってくるものです。このように経済記者は、複雑な多元方程式を瞬時に解くという能力を常に求められています。私はそのとき入社10年ちょっとの記者でしたが、ニクソンショックでそのことをつくづく思い知らされました。

日米繊維交渉では、当時の佐藤首相は繊維の対米輸出を自主規制することをニクソンに約束しました。当時、日本には沖縄返還という大きな政治課題があったので、「佐藤さんは糸を売って縄を買った」といわれたものですが、この日米繊維交渉はなかなかこじれました。結局、田中角栄さんが通産大臣になってお金で解決したわけですが、日米経済摩擦は繊維の後も鉄鋼、自動車、工作機械とつづきます。輸出品だけでなく、輸入問題も取り上げられるようになります。日本の経済政策さらに経済体質、生活慣習などもアメリカは槍玉に上げてくる。日米摩擦は点から線に、線から面になって来ました。

当時、アメリカの商務省が日本経済に関するレポートを発表しました。このレポートは後に「日本株式会社」というタイトルで訳本が出ましたが、それは「日本経済はわれわれと資本主義のルールが違う。そういうところを相手にしている」というのが主旨でした。そこまではいいとしても、日米交渉ではアメリカ製の大型冷蔵庫が、日本ではさっぱり売れないことにも文句をいってくる。今は日本でも400リッターの大型冷蔵庫が普及するようになりましたが、当時はまだ120リッターくらいの小型が主流でした。「売れないのは日本の主婦が小まめに毎日買い物に行くからだ」と理屈にならない言いがかりをつけて来たこともありました。そういう時代が

70年代、80年代でした。

物事がうまくいかないと、なにかと会議が増えるものですが、国家間でもそうで、70年代、80年代はやたらと国際会議が増えました。フランスが提唱し主要国によるサミットが始まったのは1975年でした。当時、私は特派員でロンドンに行ったばかりでしたが、当時は6か国の首脳が集まって何をやるのか、さっぱり分かりませんでした。二点指摘できます。一つは国際経済をマネージしている主要国首脳による一種の役員会のようなものです。もう一つは、石油ショックのあと各国とも政府が弱体化し、政権基盤を強くしなければいけないという共通の課題を抱いていたことです。だから一つの政治ショーとしての意味がありました。当時の日本の首相は三木さんでした。三木さんは派閥基盤の弱い人でしたが、フランス駐在大使の北原さんからジスカールディスタン仏大統領がサミットを開きたいという情報をいち早くキャッチし、最も積極的に反応した首脳の一人です。

第一回サミットはパリ郊外のランブイエで開かれましたが、われわれ特派員は会場に入ることはできませんでした。3日間の会議が終わったら記者会見が開かれるのですが、会議中は官房副長官がパリのホテルのプレスセンターでレクチャーをします。後に総理大臣になった海部さんが、その役目でした。海部さんに総理の前の晩の様子を記者が質問すると「ぐっすりと眠られました」と答えていましたが、3日間の会議が終わった後の記者会見で三木さんは、問わず語りに「初日はよく眠れなくてね」と述ベバツの悪いことになる一幕もありました。日本だけでなく、外国の特派員も同じような状況だったようですが、政治ショーとしては成功だったように思います。



去年イタリアのラクイーラで35回目の会議がありました。麻生首相は政治的にほとんど死に体での出席でした。一方、デビューしたばかりのオバマさんはスターでした。麻生さんは、そのオバマさんとなんとか面談をしたいと無理をいって15分の会談をしました。もう少し話したいとあって、あと10分間の立ち話をしました。日本のスポークスマンは、25分間の日米首脳会談を行ったと発表しましたが、アメリカの新聞を見ると「ディスカス（議論）」ではなくて「トーク（おしゃべり）」だと書いてありました。

サミットもそのうち、だんだん少数の国で取り仕切るのは無理になってきました。環境問題が大きな課題になってくると、中国やインドやブラジルを外して論じても意味がないということで、サミットは20か国の首脳会議の方に主役が移っていくと見ています。

サミットで痛切に感じることは、第35回サミットで日本の麻生さんは第1回の三木さんから数えて19人目の首相ということです。ドイツは初回のシュミットから数えて4人目、イギリスは6人目と、日本とイタリアを別とすればだいたい各国とも5～6人目というところ。次回（2010年7月）はたぶん鳩山さんが行くでしょうが、20人目になります。これでは日本の国益を守ることはどうていおぼつかないという気が致します。（編集部注記：7月のサミットに出席したのは菅直人首相、21人目となった）。

いま中国が台頭してきて、世界はアメリカと中国の2極体制ということがいわれています。2国を一緒にしてよく「チャメリカ」とか「チャイメリカ」とかいう言葉がありますが、昨年、中国は輸出額がドイツを抜いて世界一、自動車生産台数では日本を抜いて世界一になりました。外貨準備高は2兆4000億ドルで世界一。今年はGDPで日本を抜き世界2位、たぶん1位のアメリカは2030年ごろには、GDPで中国に抜かれるだろうとみられています。

このように中国の台頭は大変著しいものがあります。しかも13億の人口ということを考えれば、従来の技術体系とか国際関係を前提とすれば深刻な事態になりかねない。例えば自動車販売はアメリカを抜いて世界一になりましたが、アメリカの自動車の保有台数は人口の80%、日本は60%ということを見ると、仮に中国の保有台数が日本並に60%になったとしたら8億台になります。これは現在の日本とアメリカを合わせた保有台数の3倍近い数字です。これは環境とか資源問題からいうと地球の破滅です。

これをどうするか、大変大きな問題です。

お隣の中国を、われわれ誇り高い日本人はなかなか冷静に見ることはできません。そのうちかつての文化大革命の様な事が起こり大きく後退するという人もいるし、このまま伸びてとてつもない存在になるという説もある。日本銀行は立場上わりとバランスの取れた見方をしており、先日、佐久間調査局長の話を書きましたが、それによると「中国の経済成長はいま始まったばかりで、なにしろ労働力が次から次に出てきて枯渇することはない。経済のレベルが低いということは、これから伸びる余地がたくさんある」ということでした。中国に対する議論はいろいろありますが、「中国の大成功も大失敗も困る。そこそこ発展が望ましい」といったところが多数派のようです。日中両国が共に互いの発展がプラス材料になるようどうやって中国との関係を結ぶかというのは21世紀の大きな課題だと思います。

いまリーマンショック以来、世界経済も政治も低迷した状況にあります。議会制民主主義と市場経済というのは、表裏一体の関係にある。現在27か国が参加しているEU（ヨーロッパ共同体）の加盟条件は、議会制民主主義をとっていることと、市場経済を採用していることの2つです。それほどベーシックな2つがともにいま揺らいでいます。

市場主義万能のはずのアメリカ政府が、民間企業のGMの60%の株を握っている。また去年の金融危機に際して政府がクライスラーの社長のクビを切るような、まるで社会主義みたいなことをやっています。明らかに市場主義が行き詰まったといわざるを得ません。皮肉なことにイデオロギー的には最もアメリカ自身が忌み嫌う社会主義的な政策をとり、市場経済を強力にマネージするというのをせざるを得なくなってきました。民主主義の面からいうと、どの先進国も一種のポピュリズム（民衆迎合）に侵されています。日本の場合も、せっかく政権交代して最初は期待があったのに、右顧左弁の鳩山政権はもたつく一方。こういうていたらくなっているのは非常に残念なことです。

この市場経済と議会制民主主義の衰弱が端的に出てきているのが、財政の破綻です。財政の健全性を見る物差しはいろいろありますが、大きくいって二つあります。一つは財政の国債依存度、つまり国の借金がどれくらいあるか。これを累積ベースで見ると日本は最悪でGDPの2倍近くあります。先進国はいくら多くてもGDPの7割前後です。このように日本の財政は大変なことになっています。しか

も、これを改善する見通しがまったく立っていない。ノーベル経済賞をもらったブキャナンは「民主主義というものは必ず財政をダメにする」と警告していますが、財政がダメになるということは国が国としての役割を果たせなくなるということですから民主主義がその「帰結」として民主主義国家を破壊することになりかねません。

民主的な政治制度の下でどうやって財政を立て直していくのか。さりとて独裁政治や計画経済に戻るわけにはいかない。経済学者のシュンペンターは「自分は反資本主義ではないけれども、資本主義は成功ゆえに必ず失敗するのだ」という結論部分ではマルクス主義者と一緒である」と書いています。いま非常に危機的状況にあり、しかもその処方箋がないという状況です。経済学は非常に専門化、細分化していますが、全体をカバー出来るようなザックリした処方箋なり理論は、今まったくない状況であります。

私たちの学生時代はマルクス主義が、社会科学や哲学の領域で大きな影響力を持っていました。先日、経済理論学会の50周年記念が法政大学で行われたので、久しぶりにマルクス経済学の講義を聴きました。改めてマルクスの洞察力の凄さを感じました。その学会では、今のグローバリズムの惨憺たる状況は、まさにマルクスの予言通りだという報告がなされました。私はマルクス主義の21世紀版というのが、今日的な意味を持って来るのかどうかは分かりませんが、いまの時代に大事なものは、もう一度、マルクスのような大きな物語をきちんと構築することではないかと思っています。

さて、いま大学は大きな転換期にあります。ご承知のように全国の国公立大は独立法人となり、もはや象牙の塔に閉じこもることが許されない大競争時代に入っています。現代的課題に責任を負う知のセンター、大きな物語を紡ぐにふさわしい総合知の殿堂としての使命や役割はますます重要性を増してきました。私は混迷の時代にあって、大学の在りようが国の将来や人類の未来に大きく係っていると確信しています。

ですから大学は私たちがかつて学び卒業した懐旧の対象であると同時に、未来形で語られるべき存在だと思っています。本日は大学の同窓会でありますので、最後にこのことを申し述べて締めくくりと致します。

(本稿は、2010年2月6日に行われた関西支部総会での講演に加筆修正いただいたものです。——編集部)



# 同窓生 健筆模様

## リカードウ研究半世紀



広島大学名誉教授

**中村 廣治氏**

1953(昭和28)年卒

1955(昭和30)年博士入

リカードウに接した最初は、大学三年の折の向坂逸郎先生のゼミにおいてだった。この時、初めて『剰余価値学説史』を、少し、かじった。旧制福高に一年間在学したので、ドイツ語の基礎は身につけていたし、教養部ではずいぶん余暇があったので、フランス語の教室も盗聴した。軽い気分で出席していたところ、ご担当の永田先生が出席簿ではなく、教室を徘徊されて「君」と指定されるので、予習せざるをえず、おかげでフランス語も何とか読めるようになり、後の研究に大いに役立った(ケネー、J-B セー、L. ワルラスら)。元来、理系で入学していたが、第一学年の終わりに転科できる制度が導入され、文系に移った(生来、不器用で化学実験等が上手く出来なかったため。一年遅れるという約束だったが、暇だから文系進学が必要単位を履修し、経済学部が受け入れてくれ、遅れずに進学できた。仄聞したところでは全学の評議会でもめたらしいが、教養部の吉井先生のご努力のおかげだったらしい)。学部では向坂、高木、正田三先生のゼミに参加した。卒業が朝鮮戦争後の不況と重なり、成績もよくなかったので、何処も合格できず、いわゆるデモ大学院(大学院にデモ行くか)入学だった。家庭教師を何口もやって、学資には困らなかったが、二年になって特別奨学金(月額1万円)にありついた。とくに印象に残るのは、高木研究室のゼミだった。『資本論』第3巻第5篇の「利子生み資本」がテキスト。すでにすべて故人の小野朝男(和歌山大)、竹村脩一(大分大)、松井安信(西南学院大)の三助教授が参加されたゼミの雰囲気(小野・竹村両氏は内地留学中)。最初の数章はともかく、「仮空資本」以降の諸章は、高木先生とお三方の議論を拝聴するだけで、ほとんど理解しえなかった。しかし、この

耳学問が後に大いに役立った。ちょうど第5篇が本格的に研究され始めた時期にあたり、いわば発生期のマルクス信用論研究に立ち会う幸運に恵まれたわけだ。

大学院は理論に自信がなかったので、学史を専攻しようと高木暢哉先生の門下に入った。先生が『講座・信用理論体系Ⅳ、学説編』「通貨学派と銀行学派」を執筆されるお手伝いに、私がスミスとリカードウ、荒巻正憲(当時、助手)氏が「通貨論争」を調べた。それ以後、古典学派の貨幣・信用論の勉強に傾注し、岡橋先生のゼミでもリカードウについて学んだ。

最初のリカードウに関する論文は、「リカードウ経済学の背景と『経済学原理』の理論構造」と題する修士論文(1955年)である。記憶が定かではないが、背景に関しては、多分、産業革命の進展に伴う三階級分化に関するありきたりの叙述だったと思うが、理論構造の方は、のちの『リカードウ体系』で詳しく論じた『原理』冒頭の7章の理論構成についてだった。論証は不十分なものだったに違いないが、ほぼ、『体系』の論述の原型をなすものだった。つまり、第二章「地代論」は、たんに分配範疇のひとつとしての「地代論」とどまらず、スミスの価値論批判をライトモチーフとする「広義の価値論」として、つまりは彼の価値論の一環と扱えられるべきだ、と。審査の折、馬場克三先生が「そういう風に読むのですか」とポツンと漏らされたのを、いまでも覚えている。

学会デヴェューは、経済学史学会第14回大会(同志社大、1956年11月、DC一年)のリカードウの『利潤論』に関する報告だったが、スラッファの穀物比率論をなぞっただけのものにすぎない。

活字になった処女論文は、玉野井芳郎「古典経済学の信用理論」(『講座 信用理論体系Ⅳ』、所収)に関する書評論文「ソオントン『紙券信用論』の一考察——スミスとの関連を中心に」(『金融経済』46号、57年10月)。その執筆の過程で何度も高木教授に添削いただき、論文の書き方を懇切にご指導いただいた。その延長上に「スミス貨幣・信用理論の研究」を進め、課程博士(経済博甲)第1号をいただいた(1959年4月)。それは手書きの原稿だったが、当然、公表を義務付けられるので、大分大学『経済論集』に連載した(15-1、3、16-1、2、3、4、1963-65年)。その過程または外延に、J. ステュアート(『バンキング』、203号、1965年)、F. ベアリング(大分大学『経済論集』14-1、4、1962、63年)、T. R. マルサス(『バンキング』、224号、1966年)、H. ソー

ントン（大分大学前掲誌10-2、1958年）T.トゥーク（大分大学、上掲、11-1・2合併、1959年）、J.フラートン（同上、12-1、1960年）に関する一連の論文がある。当時は『イギリス古典派信用論史』をまとめるつもりだった。しかし、確か『朝日ジャーナル』誌だったと思うが、経済学史学会西南部会は信用論に傾斜しているという趣旨の論評を見て、価値・剰余価値論を研究する必要があると感じて、以降、その領域に重点を移した。

経済学史学会第29回大会（小樽商大、1965年9月）における羽鳥卓也教授（当時、福島大学）の「初期リカードウの分配論」のスラッファ批判は、衝撃的だった。私はスラッファの「穀物比率論」に安住していたから。もっとも、M.ブラウグの*Ricardian Economics a Historical Study* (1958)において、穀物比率論はそれ自体として完結していると思える結論に疑問を感じ、では、どうして『経済学原理』、とくに労働価値論を基礎に据える必要があったのか、とは思っていたものの、それ以上ではなかった。

実のところ、初めての北海道観光旅行に出かけようと、気もそぞろに会場の後ろに立って拝聴していたが、研究を最初からやり直す必要があると痛感させられた。旅行は天候に恵まれ、コバルト・ブルーの摩周湖の眺望は、まことに印象的だった。十勝、苫小牧を経て、大分に帰った。宿ごとの朝食の牛乳とポテトのおいしさは、いまも記憶に鮮やかだ。

その後のリカードウ研究（「リカードウ『経済学原理』の生成過程」、大分大学前掲誌、17-3、18-1、4、19-2、20-1、21-1・2合併、22-2、1965-70年）の成果に手を加えてまとめたものが、処女作『リカードウ体系』（ミネルヴァ書房、1975年）である。

英国・ケンブリッジ留学中に高須賀義博氏がベルリンからやってきて、彼の滞在中（約三ヶ月、その後P. M.スウィージーに会うと渡米）毎晩のようにお酒に付き合った。私の知らない小路で「あそこはシェリーが美味しい」などと誘って呉れたこともある（その一端は『思い出の高須賀義博』に寄せた小文に記した）。彼から、『リカードウ体系』の「書評」を『経済研究』に載せたいが、書評者をという連絡があり、羽鳥教授にお願いしたところご快諾いただいた。掲載誌・書評者双方のおかげで、本書は学界で一定の評価を得、リカードウ研究者の一角を占めることができた。

その後の主要なリカードウ研究を列挙すると、

- 「古典派経済学の理論的展開——マルサスとリ



昭和堂

2009年5月刊行

カードウ』（『講座 経済学史Ⅱ』、同文館、1976年、第二章。本書については溝川喜一氏の「書評」がある）

- 『リカードウ経済学研究』、九州大学出版会、1996年、「書評」は深貝保則氏（熊本学園大学『経済論集』3-3・4合併、1997年）
- 『リカードウ評伝——生涯・学説・活動』、昭和堂、2009年

それぞれの論旨ないし研究上の寄与（と自認するもの）を挙げれば、『体系』の場合、「地金論争」から『経済学原理』（初版）まで、一貫して彼の理論的営為を追求し、彼の「貨幣の標準尺度」（価値尺度機能と価格の度量標準把握）がスミスの加算理論（構成価格論）を止揚して労働価値論を樹立する要を成すことを論証したこと、略言すれば、貨幣・金も一商品であって、賃金・諸価格が連動するとすれば、金にもその作用は及ぶはずだから、その作用は相殺されて、価格変動としては表れず、したがって、価格変動の真因は相対的投下労働量比に求められるという、彼の労働価値論成立の論理を示したこと、『原理』「理論編」（最初の7章）の理論的序列の意味を解明したこと、つまり第1章「価値論」に直続する第2章「地代論」の必然の位置を彼のスミス「価値論」批判の帰結として示し、両章をもって「広義の価値論」と把えたこと、にある。

『研究』は、うへの労働価値論の成立を正面から論証する（第1章）とともに、第2版以降の＜価値論修正＞展開の過程を追跡して第3版における新展開の態様を巨細に解明し（前編）、併せて彼の経済

学の諸問題（数量説との関連、賃金論の基礎的理解、「一般的過剰」論等）について私の理解を提示した（後編）。当時、膀胱癌を宣告されていたので、最後の著書になるかと覚悟していたが、治療によって快癒した。本書には深貝保則氏の懇切な「書評」（『熊本学園大学 経済論集』、3-3・4合併号、1997年5月）がある。

『評伝』は私のリカードウ研究の「集大成」の願いをこめて刊行した。理論的研究としては、前二著の水準を抜くものではなく、それらを集約しつつ、彼の生涯にわたる諸活動（議会活動を中心）を補い、彼の生涯・学説・活動を描くことに努めた。それによって、政治的・実践的にもリカードウがラディカルなリベラル・デモクラットであることを浮彫りにしえたと思う。

同「書評」は経済学史学会『経済学史研究』（52-1、2010年7月）に千賀・佐藤（有）両氏によって分担・執筆されている。

私は原典・原資料を重視し、海外の研究に稀にしか言及しない。確かにこれは、私の怠慢のゆえだが、管見の限りでのそれら（例えば、G. A. Caravale and D. A. Tosato, *Ricardo and the Theory of Value, Distribution and Growth*, 1980やTerry Peach, *Interpreting Ricardo*, 1993）の必ずしも高くない評価を暗示しているつもりだ。後者は前者にはるかに優っていて、S. Hollanderの大著 *The Economics of David Ricardo*, 1979における新古典派的理解に対抗して、リカードウ理論を再構築しようとしているものだが、なお、労働価値論にいたる論理を、リカードウに即して明示しえないところに難点がある。ヌメレールを不変=1とするアプローチによる限り、その解釈は、おそらく、リカードウと無縁だろう。つまり、私の水準に達していないと信ずる外国の文献を列挙して論文の飾りとするのは、少なくとも、私の趣味には合わない。それに学んだり、教えられたり、考えさせられたりした文献は、たとえそれらに同意しなくても、残らず示しているつもりだ（例えば、J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, 1954やS. Hollander, *The Economics of David Ricardo*, 1979）。

私は優れた恩師（向坂、岡橋、高木先生）に恵まれ、真実・羽鳥両先輩のご教示とお引き立てを蒙った。真実氏は『リカードウ入門』において、進行中の私の論文を好意的にご紹介くださったばかりか、教えていただかなければ、未知のままか、見落としに違いない文献を教えてくださいましたし、羽鳥氏は、『リ

カードウ研究』に収録されたご研究を通じてご教示いただいただけでなく、私信によっても絶えずご批判・ご教示くださった。金融学会の折、研究室（当時、岡山大学）を訪れ、『リカードウ体系』について、誤植・不適訳のご指摘を始め、諸論点について巨細にご論評いただいたことを、昨日のここのように鮮明に覚えている。また千賀・佐藤（有）氏らの優れた後輩に啓発・刺激されながら、半世紀の研究生活を過ごせたのは、まことに幸せだ。

九州大学所蔵の文献は、関源太郎氏を通じて利用させていただいたし、羽鳥教授はお手許の貴重な資料のコピーを惜しみなく分与くださった。このようなご援助なしには、私の研究はもっと貧しいものになったに違いない。

一言つけ加えれば、経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善）中の「リカードウ」の項は、私の研究を簡潔に要約している。あわせて参考いただければ幸いである。

同学の方々は無論だが、とりわけ大学院以来の畏友・川島信義氏（西南学院大名誉教授）、広島大学以来の高哲男氏（九州産業大大学院教授）のお仕事に刺激・鞭撻されたことは数限りない。隣り合わせの研究室で彼のいれてくれたコーヒーを喫しながら、必ずしもアカデミックとは限らない楽しかった雑談が想起される。その間、彼の博識に教えられることが少なくなかった。もっとも、その間、ヴェブレンについては、耳にたこが出来るほど聞かされたけれども。川島・高両氏の研鑽に刺激されて、といえは格好いいが、ありていに言えば、先輩としての意地から、少なくとも、お二方から軽蔑されたくないという思いが、私の怠慢を鞭打ち続けたに違いない。関源太郎氏の変わらぬご厚意が資料的に私の研究を支えてくれたことに深謝する。思えばこれも、高木先生の学恩の余慶に違いない。

半世紀前の留学中にケンブリッジでコピーし、長らく篋底に眠っていた初期地金論争の文献を、目下、精査中である。ソートンは勿論だが、あまり知られていないJ. ウィートリー『通貨論』やリカードウが『地金高価論』「序論」で言及したP. キング『イングランド銀行およびアイルランド銀行制限考』も、そのなかに含まれる。F. ベアリングと「地金論争」の嚆矢をなすボイド=ベアリング論争はすでに脱稿し、ウィートリーとキングの翻訳も済ましているの、数年中にこれらの研究を、最後の著作にまとめたいと思っている。樂碁に費やす時間がそれを妨げる大敵、と分かっているながら、生来の意志薄弱、い



まさら、如何ともし難い。

(2010年8月13日)

## 『マーシャル経済学研究』（ナカニシヤ出版、2008年）



福岡女学院大学人間関係学部教授

岩下 伸朗氏

1985(昭和60)年博士入

「<sup>とき</sup>時間はたちます、ながれます、<sup>じかん</sup>今の時間を大切に」

いかにも稚拙な標語だが、これは40年ほど前、私が小学

6年生の時、久留米市「<sup>とき</sup>時間の記念日」コンクールで特賞を射止めた標語である。こう書き出すといかにも私が熱心な文学少年でもあったかに誤解されるかもしれない。が、思い起こすにこの作品、全員提出の国語宿題の一つで、その中から適当に選択されてコンクールに出品されたようで、私自身はその応募すら認知していなかったいわば棚ぼたの受賞作品なのである。とはいえ、最初の「時間」を「とき」、2番目を「じかん」と読ませるなどは、一応小学生なりに思考したあとはみられるが（自画自賛）。この生涯唯一のヒット作を、本務校講義の脱線時などにときおり持ち出してはきたが、今また改めて自分自身の戒めにもなっている。「『中年』 老い易く学成り難し」の心境だからである。

このたび、20年以上の牛の歩みの研究生生活の一区切りとして、出版することができた拙著『マーシャル経済学研究』は、私なりの「今の時間」の積み重ねの成果ではある。

この拙著形成への最初の「今の時間」は、1983年に大学院経済学研究科に入学し、荒牧正憲先生と関源太郎先生（当時助教授）のゼミで本格的に研究活動に入った時にまでさかのぼる。経済学部はちょうど川端久夫先生や深町郁弥先生が学部長としてそのかじ取りをなされていた時期にあたる。当時の大学院荒牧ゼミには、助手の方、博士後期課程、修士課程各学年にそれぞれ、1、2名の大学院生が在籍していた。毎週月曜日午後「合同研究室」（現在は大学院生室の一部のようなものである）において総勢10名前後の大所帯でゼミが行われていた。毎年、基本的には『資本論』の輪読を中心にゼミは進められ、そ

の合間に大学院ゼミ生による各個人研究報告が行なわれ、荒牧先生から指導を受けるという形をとっていた。荒牧先生は小柄ではあったが、眼光鋭くなお旧帝大教授の雰囲気（これは私の誤解かもしれないが）を残されてもおり、正直に言えば、毎週のゼミは緊張感のたいへん高い厳しいものであった。もっとも、こちら側の知識量の不足、思考力の低さに起因しての緊張感でもあったのだけれども。その厳しさは、荒牧先生の学問研究に対する真摯な態度の裏返しであることは確かだった。

しかし、ゼミでの緊張感の反作用？でもあろうか、当時の荒牧ゼミ所属の助手、院生の皆さんは関先生の指揮の下、大変まとまりがよく、いろいろな作業や学会運営活動などを経済学史研究室として和気あいの雰囲気の中、こなしていた。当時はようやくワープロやPCが導入され始めたばかりで、現在とは異なり手軽にプリンターによるカラー印刷など高嶺の花の時代でもあった。そのため、学会アンケートはがき作成等を複写原紙から手刷りするという、今からすると原始的（それでも当時としては効率的？な）作業を半日がかりで行っていたことなどが懐かしく思い出される。

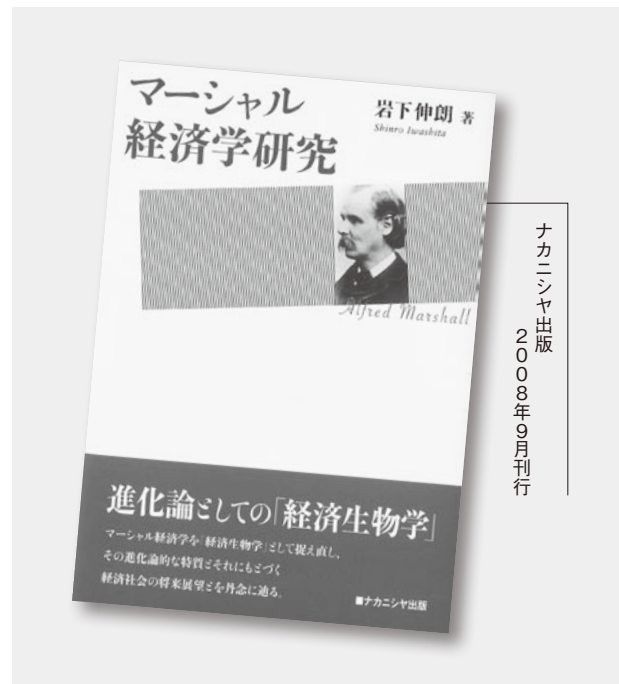
加えて、当時の経済学研究科（経済学部棟3階フロア）の大学院生全体にも強い連帯意識が存在していた。学問的対象、イデオロギーやその視点などを異にする研究者の卵たちではあったが、常に相互に協力しあい研究に向かおうとする雰囲気が強くあった。その延長線上に、夜の飲み会部隊やゲーム理論の検証よろしくマージャン部隊が形成されてもいたようだが。私自身は前者にのみたまには参加し情報交換をなしていた。他大学大学院では、その学問的立場を異にするシューレ間では同じ学内でも「口も利かない」ところもあると聞いていた（真偽のほどはわからない）が、そうしたことは九大経済学研究科ではまったく考えられないことだった。こうした雰囲気は、大学院自治会の活発な活動とも関連しており、実際荒牧ゼミが行われていた「合同研究室」はその利用裁量が自治会にまかされていたし、私もその委員長を担当していた際には、川端学部長に大学院生の研究環境の整備向上を掛け合った記憶もある。

そうした中で、私自身は修士課程においては、欧米では少数派で貴重なマルクス主義経済学者であったモーリス・ドップ（1900-1976年）における古典派経済学認識から研究を開始することになった。ドップのような幅広い学識をもつ学者を理解し整理

すること自体、実に困難であったが、彼のイデオロギー（＝ビジョン）観と彼が支持する理論の（ネオリカールディアンとされるスラッファに親和的な）特徴を中心に修士論文をなんとかまとめるにとどまった次第であった。それゆえ、博士後期課程に進学したものの、さて、これをどう展開させていくべきか、少々困惑することにもなった。ただ、ドップがマーシャル（1842-1924年）にたいして示していた「新古典派」一般にたいするものとは異なるアンビバレントな評価が、私がマーシャル研究に着手していくひとつのきっかけではあった。

さて、アルフレッド・マーシャルというと、皆さんはどのようなイメージをもっておられるだろうか？。周知のように彼は、一般的にはイギリス新古典派＝ケンブリッジ学派の始祖とされている。真面目に「経済学史」を勉強された方であれば、さらに「部分均衡論」「短期・長期均衡の区分」「内部・外部経済」「需要の価格弾力性」「人的資本」「有機的成長」といった諸概念を思い浮かべられるかもしれない。これらの諸概念のいくつかは現代経済理論にも大きな影響を及ぼし続けているし、それらがマーシャル経済学を特徴づける重要な要素であることも確かである。

本拙著では、そうした諸概念やそれらに込められた思考の特徴をも含めて、マーシャルが生き、展望した歴史的な脈に照らしながら、その経済学体系の基本骨格を今一度、整理しなおす作業を行っている。その際のポイントは、従来の『経済学原理』（1890年）中心の限定的な視野を超え、彼自身が苦勞して整理し出版にこぎ着けた、いま一つの大著『産業と交易』（1919年）（当初『原理』第2巻として出発）にまでその視野を広げていることにある。そのうえで、当時の欧米社会・思想界に広範かつ多大な影響を及ぼしていた「進化論」の思考やアプローチを彼はどう受容していたかを再確認し、整理のモチーフとしている。進化思想の受容とも相関して、マーシャルはこの両大著を中核として連続的な論理展開を遂行しつつ、一貫した「経済生物学」を展開していたのであった。こうした理解に本拙著最大の特徴がある。確かに従来より、「経済学のメッカは経済動学よりも経済生物学にある」とのマーシャルの言葉は注目されてはいた。が、同時にこれは彼の「約束事」にすぎず、その具体的な展開は見られないとされてきたが、それはあまりにも消極的にすぎる理解である。マーシャルは、すでに「経済生物学」の展開を思考し、遂行していたのであり、そのことは、とくに両大著での叙述と論理にしっかりと内在してみれば、



ナカニシヤ出版  
2008年9月刊行

ば、明らかにはずなのである。

「牛の歩み」の「今の時間」の積み重ねとして以上のようなスタンスと特徴をもつ本拙著をまとめていく過程の折々において、しばしばより強く感じざるをえなかった点に、最後に言及しておきたい。それは「間接情報」のメリットとデメリットということである。ほぼ四半世紀前、最初に私が保有したマーシャル理解やイメージは、当然その多くを間接情報（マーシャルの先行諸研究等）に負っていた。それらには大変有益なものが多く含まれていたことは言うまでもない。しかし他方で、その後マーシャルの原典自体に沈潜することを通して得ることができた（直接）情報の多くが、さまざまな間接情報とは乖離していることがいかに多いか、もまた事実であった。こうしたことは、おそらくはなにも、専門的研究活動にだけ当てはまるものでもないであろう。人々の一般的な社会生活や職業活動等々において、それぞれの形でではあれ、いわば「百聞は一見に如かず」の類いは思いのほか多く存在するようにも思われる。もちろん「百聞」もまた重要であることに違いはないのだけれども。

「同窓生健筆模様」欄への投稿としては、思い出話の比重が高くなったが、拙著を巡って少しお話しさせていただいた。文末ではあるが、同窓生各位のそれぞれの環境での「今の時間を大切に」されたご活躍を祈念する次第である。

## 『現代労働問題分析 —労働社会の未来を拓くために—』



大分大学経済学部教授

石井 まこと氏

1990(平成2)年卒

1992(平成4)年博士入

「私と違うことを言いなさい。」

拙編著『現代労働問題分析』

を上梓するにあたってモチーフの1つとしたフレーズだ。今から22年前、経済学部3年生の時、労働社会の歪みに違和感を覚えていた私を受け止めてくれた、当時、横浜国立大学から赴任して日も浅かった下山房雄(先生)さんの言葉である。下山さんも氏の先生から受け継いだフレーズであったと記憶している。このシンプルな言葉と下山さんとの出会いがなければ、今の私の研究生活はなかっただろう。演劇に入れ込んでいた私にとってみれば、この言葉は世阿弥『風姿花伝』の「秘すれば花なり」と同様の深みがある。

下山さんは私にとって「下山先生」である。だが、研究者仲間であり、ともに社会科学を学ぶ者として、そのように呼ぶのが自然と感じるように「訓練」されていて、先生と呼ぶと少し違和感さえ感じ、こうした呼称を使い続けている。下山さんの勧めで入った社会政策学会も、当時は〇〇先生と呼ばずに〇〇会員と呼んでいたことも、研究者とはそのようなスタンスをとるものだとして初期の段階で深く納得したことも大きい。

その下山さんの教えを受けてから20年近くの歳月が流れた。下山さんも今年(2010年)で喜寿を迎えた。現在でも東京で九大時代の院生を中心に月1回の「関東社会労働問題研究会(関東社労研)」を主宰し、その矍鑠とした姿は老いを微塵も感じさせない。

今回の拙編著は同研究会に集う仲間を中心に企画したものである。格差社会、貧困問題の解決が重要性を増す背景には、この20年間一層進化してきた新自由主義的潮流がある。そうした潮流とは一線を画して研究活動を行ってきた我々の考えを、特に若い世代を意識し、「競争型」労働社会とは異なる「協同型・共存型」労働社会を構築するための教科書を



もって、下山さんの喜寿記念の書としようとしたのである。

喜寿記念をテキストという形で出版するのは一風変わった企画であったが、同じ九大同窓生の兵頭さん(専修大学准教授)、鬼丸さん(桜美林大学准教授)の協力や、法律文化社の編集者である田藤さんにも助けを請い、出版までこぎ着けた。特に法律文化社の田藤さんには教科書という企画にもかかわらず喜寿記念付録として24頁からなる別冊「下山さんの履歴書」をつけてもらうというわがままを通してもらったり、学生が購入しやすいように値段を抑えていただいたりとした協力は大きかった。

ところで、この「履歴書」には下山さんが1958年に職業研究者を開始してから今日まで著した著書16点、論文等399点を全て(おそらく)列挙した。学術論文でなくても雑文もその「本質」において同じとする下山さんの考えから「雑文等」188点も下山さんの記憶をもとに、可能な限り網羅した。編者の3人に加えて、下山さんが理事を務めていたシンクタンク・かながわ総研の岡本一さんや労働科学研究所の赤堀さんにも書庫に潜ってもらい、骨を折ってもらった。お陰で、ほぼ完璧な形で業績目録が完成でき、このような形での業績一覧は他にはないのではと少しばかり自負している。

今回の執筆は前述の関東社労研のメンバー鬼丸さんよりの打診から始まった。これまで下山さんの暦祝いにおいて、一度も論説を寄せたことがない私としては、いつかは暦祝いの作成をと思っていたこともあり、すぐに本書の企画を考えた。今回の執筆陣



は下山さんを除いて16名に及ぶ。実際にはもっと多くの方が参加する予定であったが、投稿時期等の関係で確実にご投稿頂ける方に絞らせていただいた。実は執筆陣のなかで下山ゼミは私だけである。更には、下山さんの九大時代に薫陶を受けた院生は日本人では私1人、あと韓国の金さんという院生が博士号を取りにきたのみであった。そうしたことから、記念本は難しいと考えていたところ、関東社労研のメンバーを中心に執筆者が揃い、一冊の体系的な教科書ができた。

本書の「はしがき」にも書いているのだが、私は学部生・院生の当時演劇青年であり、研究活動より演劇にかける時間の方が多かったように記憶している。博士後期課程に上がるときにも成績は良くなく、当時の宮川経済学部長から呼び出され、お叱りを受けた不良学生であった。研究と演劇の二足の草鞋を履きふらついていた私を、下山さんは目先の成績には目をつぶり、不良青年の成長を暖かく見守って下さった。そうした私が現在、学部生や院生を教える立場になっている。今振り返れば、こうした時間を過ごしたことで、教育者としての訓練を受けていたことをつくづく感じる。下山さんは絶えず権威や常識と対峙する。そのひたむきな姿勢を少しずつ学ばせてもらった。そんな姿勢は今回の本書に掲載し

ている論文でも健在である。大学教員として職を全うできているのも下山さんのこのスタンスに接していたからであるし、また出来損ないの院生を見捨てないで見守って下さったからである。本稿で本の内容をもっと紹介するべきだが、下山さんとのエピソードに終始した。本書は下山さんなくして語れないものであり、私も下山さんのためでなければ、多くの執筆者を束ねて編集をすることはできなかったためである。

私が学部・院生の頃、学部図書館に成田さんという当時経済学部で最も古参の司書の方がいらっした。雑談の折、成田さんはある人の記念論文集の巻頭言をみせて、下山さんの記念論文の巻頭言を書くときは、この人みたいに誤字はしないようにと忠告を受けた。その当時は現実味がなかったが、今回、本書の「はしがき」を書く際にその言葉がリフレインで思い出され、細心の注意を払うと同時に、懐かしい思いに浸ったりもした。

九大経済学部では6～7年前まで大分大学から労働経済論に集中講義の担当者を出していた。私のところに順番が回って母校への恩返しが少しはできるかと思っていたところが、開講されなくなったようで、残念である。本書を九大生がいかに評価するか試してみたかったのだが…。

### 編集部よりのお知らせ

- (1) 第47号に『学徒出陣』のころの九州帝国大学」を寄稿いただいた内田勝敏先輩の肩書に誤りがありました。同志社大学名誉教授・東海学園大学名誉教授と訂正しおわび申し上げます。
- (2) 第48号掲載の本田精一先輩「老残漫筆」に日本経済新聞昭和六十年二月の「交遊抄」欄の「鬼手仏心」を複写引用する際に左端の二行が脱落してしまいました。改めて全文を掲載致します。同窓の諸兄姉の御味読をお願い申し上げます。



- (3) 次号は第50号となります。昭和50(1975)年に設立された同窓会の35周年にも当たりますので第50号を記念号として、同窓の皆さまから「リレー随想」を次の要領で募集致します。九大時代の思い出、卒業後の社会人としての歩み、最近の感慨その他自由に題材を選んで御執筆をお願い申し上げます。字数1200～2400字程度。締切2011年1月末。問い合わせは同窓会事務局まで。

# リレー随想

## 戦中戦後の九大時代の思い出



半田 博氏

1947(昭和22)年卒

### 入学試験

人生九十年に近い過去を振り返ると矢張り九州帝大時代が最も懐かしく思い出される。

特に私達同期の学生達にとって途中で学徒出陣を強制されたことを特別に重く感ずる。

九大法文学部に入学したのは昭和十八年九月。同志社高商から受験したが、その当時は大学進学は卒業生の一割以内に制限されていたが、私は幸い受験資格を得ることが出来た。初めて見る九大法文学部の白亜の殿堂はすばらしく立派に見えた。学部構内にある幾つもの大教室は受験生で満杯。今更の如く入学の困難さを予感した。試験は二日間。特に難問だったのは哲学で「批判主義」の四字だけだった。

私はまずまずの答案を書くことが出来た。あまり自信はなかったが、郷里金沢に帰った五日後に合格の通知を受取った時は天にも昇るような気持ちになった。

### 自由な学風

大学からの合格通知書には入学式の日程等は記載されていなかったもので、私は早々にも博多に向かった。白亜の殿堂は一段と美しく見え、快く私を迎えてくれるように思えた。学生課に入学届を提出すると経済科生として必要な授業科目の講義に出席して試験を受けるか、又は論文を提出して所定の単位(優、良、可)二十三単位を取得して卒業する。但し在学期間は六年迄とするという簡単な説明を受けた。戦時中であつたが、大教室は半数以上の学生に占められていた。私は真っ先に波多野鼎教授の「経済学史」の講義に出席した。同志社時代、波多野先生の「経済学入門」を読了して経済学の概要を理解した懐かしい思い出があつたからである。入

学して驚いたことは卒業に必要な二十三単位はすべて学生の自由な選択に任されており、従ってクラスの編成等は無く出欠のチェックもなかった。軍事教練も同志社時代とは比較にならぬ程簡単であつた。戦時体制絶対の時代にあつ

てもこの様な自由な世界が日本の片隅に残っていたのかと思うと改めて九大進学に感謝した。そして卒業する迄徴兵延期が続いてくれることを念じた。



九大正門前 昭和21年(有志一同)  
(筆者は前列の中央)  
後方の黒い建物は法文学部

### 学徒出陣・資本論発見

しかし乍らこの恵まれた学生生活も入学三ヶ月後に徴兵延期は中止となり、文科系の学生は全員徴兵と決まった。余りにも厳しい国家の命令であつた。昭和十八年十二月一日、私は金沢城内にある歴史の古い歩兵連隊に入隊した。一年後には下士官に任官し、金沢市郊外にある野戦部隊に配属された。千葉県九十九里浜での出撃が予定されていた。

たまたま公用で金沢市内に外出した時、学生時代から時々訪問したことがある古本屋に立ち寄った。丁度本屋も疎開の最中で家財道具や商売物の古本を荷車に積み込んでいた。ふと見ると古本の山の中に小さな文字で『資本論』と書かれた五冊の本が細紐で縛られているのが目に飛び込んで来た。戦時下の真只中にマルクスの『資本論』が目の前にあつた。私は即座に禁断の書を買ってくれるよう頼んだ。本屋の主人は驚きの表情で販売を拒否した。現役の軍人に『資本論』を買ったことに対する後難を恐れて仲々承知しなかった。しかし私の強引な頼みに漸く承知してくれた。新聞紙に厳重に包装し、金沢市内の実家に急いだ。家に着くなり社会主義のバイブルといわれていた『資本論』を開けてみた。高島素之氏の訳書で昭和二年改造社発行であつた。早速読み始めたが、これが仲々難解なのである。容易に読みこなせるものではないことを知り、元の包装をして両親には疎開の際には真先に運んでくれるよう依頼して帰隊した。



## 戦後の九大、卒業

終戦直後幸いにも内地勤務だった私は直ちに復員し、九月中旬頃博多に帰ることが出来た。予想通り博多の街は米軍の空襲の為全滅していた。幸いに箱崎地区は健在だったが白亜の殿堂だった法文学部の建物は真黒なペンキに塗りつぶされて無残な姿になっていた。が、内部は昔のままであった。私も大学裏門の近くに下宿を見つけることが出来た。学内の教室では戦時下であっても講義は静かに平常通り行われていたようで、私が復学した当時は十名程度の学生だったが、その後次第に元気な学生が増え始め十月末頃にはほぼ教室は一杯になった。その頃には軍隊の将校用の軍服を着用して講義を受ける学生が多く交じていたのは異様であった。私は休講の時間は図書館に入って戦時中金沢で強引に買った『資本論』を読んだ。理解が難しく遅々としたスピードであった。

間もなく戦後の混乱のなか学生達に明るいニュースが流れた。昭和の初頭左翼系教授として九大から追放されていた向坂逸郎、高橋正雄、佐々弘雄、石浜知行教授等の方々近く復学され講義を担当されるとの朗報であった。

しかし乍らこのような明るいニュースとは反対に激しいインフレーションが来襲し学生達の生活を土台から苦しめ始めた。大学の授業料は据置であったが、下宿代や食料品等の高騰が日一日と激しくなり、実家からの送金も不足がちとなり、やむなく近所の農家の手伝いをしたり、米軍キャンプの夜警等をして毎日を過ごすのが精一杯という状態になって来た。最早残念ながら一日も早く所定の学科単位を取得して卒業し、就職を選択する方法しかなくなって来た。

学生課では自分が選択した学科の成績は勿論のこと、他の学友達の分も簡単に見ることが出来た。幸い私の成績は可が一単位のみ。他は優良が半分程度であった。急いで卒業の手続きを取った。たまたま金沢市の地方新聞「北国新聞」が私を頼って、高橋正雄教授へ講演依頼をしたことがあって、快諾された先生を金沢まで御案内した。そういう縁故を頼りに、先生の紹介で大阪の紡績会社に就職することが出来た。しかし乍ら就職を急いだ為復学された教授の方々の講義を殆ど聴くことが出来なかった。私の九州帝大時代一自由な学風に感謝しながら、戦争直後の生活苦の為に早々のうちに卒業してしまったことが今もって後悔の種になっている。

## リレー随想

# 私が九大経済学部で学んだこと



酒見 辰三郎氏

1952(昭和27)年卒

今年の或る日、郷土の先輩木村晃郎先生宅で九大経済学部名誉教授・福留久大先生に初めてお逢いした。其の時、

先生の貴重なお話を拝聴し、私もまた久し振りに九大の学生時代の思い出など語り楽しいひと時を過ごした。その一月後先生より同窓会報「リレー随想」への投稿の依頼があった。私は殆ど同窓会の会合など出席したことがなかったので資格があるだろうか一瞬躊躇した。しかし卒業生の一人として、私が九大で学んだ事、またその事が後々の社会生活の中でどの様に活かされたかを述べ、若い後輩の方に少しでも参考になればと思い快くお受けした。

昭和の初めに生まれた我々世代は、戦時中は戦争の影響で不十分な勉強で終わった。当時旧制中学は5年制度であったが、満足に授業を受け勉学出来たのは3年間であった。昭和19年学徒動員、翌年3月戦時繰上げ卒業などの為である。20年8月終戦となる。

私は翌昭和21年大分経済専門学校（現大分大学経済学部）入学。大分経専では経済学・経営学など色々学んだが、更に勉強を続けたいので大学を目指した。昭和24年九州大学経済学部に入學する。九大法文学部経済学科が経済学部になったのはこの年であり、我々は経済学部最初の入学生であった。60年も前の昔のことであり、記憶も定かではないが当時のことを思いつくまま述べてみる。当時九大経済学部には向坂逸郎・高橋正雄・栗村雄吉・宮本又次教授等々錚々たる有名な教授が多数居られた。マルクスの資本論を土台にした向坂教授の経済学原論は理路整然として勉強になった。高田保馬の門下生である栗村雄吉教授のマルクス批判の経済学概論も興味を持ち受講した。栗村教授の試験問題に「マルクスの労働価値説について述べよ」とあったが、未熟ながら自分なりの意見を述べ回答したと思う。また豊富な経済史の知識を持った宮本教授は、講義のとき



簡単なメモを持参され、殆ど何も見ることなく早口で講義をされ、その内容の項目など次々と黒板に書かれ、私はノートをとるのに苦労したが、殊に西洋経済史の横文字にはお手上げであった。しかし内容は面白く、近世日本の市場経済など解り易く、私は日本経済史に興味を持つ様になった。高橋教授はくだけた方で、高橋ゼミでの勉強会で「博多どんたくの経済的効果」について考えてみないかなど面白い問題を出された。また高橋ゼミのレポートの課題は自由で、私は「米国経済と対外政策」との題目で400字原稿用紙25枚にまとめて提出した。丁度朝鮮動乱勃発の頃で、政治・経済的にも米国の動向が注目されていた。私の未熟なレポートを細かく観察され、誤字・文章のおかしい所など訂正されて恥を掻いたが、また有難いとも思った。最後に「大人しいレポ、もっと理論的に割り切ったらよいではないか」との講評を頂き以後勉強の指針になった。今では当時のノートなど資料は一切ないが、このレポートだけは手元に置いている。また九大は総合大学であり、経済だけでなく法学部の講座も自由に受講した。憲法・民法（総則・債権法）・商法などの単位をとったが、舟橋教授の民法債権法は解り易く後々まで仕事に役立った。具島兼三郎教授の外交史の講義は内容も面白く、また近代史の一面を学ぶことができた。以上私が九大経済学部で学んだ一部を紹介した。自分自身十分に理解できたかは疑問であるが、私には何れも興味のある講義であった。また、戦後の学生は当時娯楽も少なく、勉学に励んでいたと思う。私もその刺激を受け、この頃から読書の習慣がついた。

昭和27年3月九大経済学部を卒業し民間企業（明治製菓）に就職した。業務は停年まで殆ど営業部門であった。大学で学んだ知識は学術・教育分野の人達のように直接利用することは少なかったが、業務遂行の中で活かされたと思う、特に管理職になってから。入社して約20年後、広島で薬品部の支店長の時、日本マネジメントスクールの通信教育を約1年間受けたことがあった。恐らく管理者研修の一つであったと思う。「混合経済とは何か」「経営理念とは」「流通革命の改革の方法」などなどの問題について毎月レポートを提出した。忙しい業務の間での学習だったが、この時は久し振りに学生時代に戻って関連の参考書など読んで勉強した。このように自分の業務を、過去に学んだ知識により整理することもその後の業務遂行に役に立ったと思う。

昭和63年4月停年退職。これから私の第二の人生がはじまる。私は定年後22年になるが、古文書と郷

土史の研究で明け暮れている。私は歴史（近世史）が好きで会社在职中も古文書を読んだこともあったが、本格的に古文書の勉強をしたのは定年後郷里に帰り、福岡の朝日カルチャー古文書講座に入門した時からである。この講座で二人の先生にお世話になった。偶然にも御二人とも九大経済学部の同窓生であった。武野要子先生（昭28年卒）と能美安男先生（昭30年卒）である。両先生には福岡早良公民館の講座でも教えて頂いた。非常に丁寧で解り易かった。私が今尚古文書の勉強を続けているのは両先生のお陰である。能美先生は数年前亡くなられ残念である。その後、地元の小郡を初め、久留米・甘木・田主丸等筑後地域の古文書会に顔を出し、筑後地区の近世史の研究を始めた。そのことから地元の小郡市郷土史研究会、また周辺地域の久留米郷土研究会・福岡地方史研究会等に入会し地域の郷土史愛好の方達と交流し、郷土史の研究を楽しんでいる。福岡の会では九大名誉教授秀村選三先生に時々お会いすることもある。

現在私は82歳の高齢者であるが、今でも古文書を読み、郷土史の研究を楽しく続けられるのは、若い時大学で学んだお陰と思う。戦時中少年時代殆ど勉強してなかった私にとって戦後専門学校・大学殊に九大経済学部の3年間は貴重なものであった。

(2010年8月)

## リレー随想

### 九友会のこと



九友会幹事：伊藤 匠氏  
レポーター：長尾 磯夫氏（右側）

長尾 磯夫氏  
1957(昭和32)年卒

今年も、一月末、代々木倶楽部に、仲間が、三々五々と現れた。

九友会では、一

年ぶりの出会いが多い。

もっとも、囲碁、麻雀、ゴルフの仲間は、その都度旧交を暖めている様ではある。

幹事は、いつもの様に、伊藤匠氏。

会計幹事は、まだ、現役で、税理士をやっている藤原澄人氏、会場設定は、新日鐵OBの高崎幸雄氏、いつもの様に、顔を利かせて、倶楽部最上の「わたらの間」を取っている。

先般は、ブックしているのに二人が、定刻に現れない。遅れてきた某君は「俺は、正規の時間に来た、去年も、この時間だった」と言い張る。もう一人の某君は、あとで、「一日、日を間違った」と、宣った。

もっとも、幹事も、挨拶の際「今日は、ちょっと語尾がはっきりしないと思うが…」と、ごちない挨拶を始めたが、これは、入れ歯を家に忘れてきたとのことだった。

卒業後、半世紀を過ぎ、リタイヤして、十数年ともなれば、まあ、こんな姿は、当たり前姿となっている。

あと、数年経つと、もう皆、八十路、まあ、致し方ナイと私も思う。

でも、顔を合わせたら、昔のママ、懐かしい昔のキャンパス時代に戻っていた。

### ～学生時代～そして門出～

入学が、昭和二十七年、戦後七年目で、福岡も戦災に遭い、復興の途上、経済的な余裕もなく、それぞれ、学校には入ったものの、学費稼ぎのバイトに明け暮れた時代であった。

新しい学制に変わって、かつての旧制福岡高校は、九大教養部となり、六本松には第一分校、第二分校は、久留米にあった。

教養部は、旧制高校の伝統を継承し、寮に入った連中は、貧乏であっても、バンカラな恰好をして、天下国家を論じ、中洲を飲み歩いたものだ。

### 東京九友会五月の集い



代々木倶楽部 アゼリアの間  
伊藤幹事より、今回、初めての屋間の会をやると云うことで、召集が掛かった。場所は、何時のも代々木倶楽部ではあるが、お庭のさつきを愛でながらのアゼリアの間での会合である。  
参加メンバーは、写真後列から、藤原氏、白岩氏、田中氏、小山氏、山本氏、長尾、幹事伊藤氏、前列：加來氏、高崎氏、福岡氏、吉橋氏、久原夫妻、榎氏です。

箱崎の学部に進学したら、教室毎に、都度分散するので、ゼミが一緒の人以外は、あまり交流がない。

で、第一分校、第二分校の学友は、今に至るも、強い連帯感で結ばれている。

### ～卒業、そして就職～

我々が卒業した昭和三十三年は、不況の真っ只中、特に、九大経済学部は、マルクス経済学のメッカとされ、向坂教授が、昭和二十二年から三井三池炭坑のストを通じ、ここを来たるべき社会主義革命の拠点として戦闘的な活動家の育成を行ったとされ、以来「アカの学部」として名を馳せ、故に当時の一流企業からはやや敬遠され、就職には難儀したものである。

当時の就職戦線は、マル経の九大より、ケインズ理論等を優先した近経を学ぶ一橋大学などが、優先採用されていた時代だった。

左様な実体を踏まえてか、私のゼミの高橋教授は、穏健派ではあったが、講義の最中に「ココは、就職試験の時は、こう言ってはダメですよ」と冗談交じりに、講話をされたものでした。

それでも、まあ、真面目に勉強した人は、鉄鋼、総合商社、金融関係、その他大手企業に職を得たが、バイトで大忙しの小生など、推薦された大手の会社はすべて全滅、たまたま友人が紹介する事務機を扱う小さい商社があり、そこに職を得た。

全国で、百名くらいの小企業、ちょっとヘジテイトしたものの、その後の事務機械化のブームで、数年後には一千名の規模となり、時流に乗って四千名の規模となり、忙しく働いている内に、三十八年の月日が経ちました。

この間、時代の推移で、当初のメカの会計機から、大型電算機の時代になり、その後インターネットの普及でマイクロ・コンピューター分散の時代を経、私が退職する頃迄にIT産業も、栄枯盛衰の大きな変遷がありました。

今は、クラウド・コンピューティングの時代となり、更に、新しい企業が台頭し、この半世紀、どの企業も、大きな世代交代の波に飲み込まれて行った。

我々の多くの学友も、その影響をモロに受け、様々な変化を体験してきた。

そして、今、共に闘ってきた戦友が、年に一・二度、顔を合せてお互いの歴史を噛みしめては、その余韻を楽しんでいる。

九友会は、一つの時代、一つの役割を終えたオールド・ボーイ、そう云った仲間の集まりです。



### ～九友会の発足～

九友会は、今を去る二十数年前、卒業後三十年を経た頃、東京在住の同窓生が、年に数回、旧交を暖めようと、伊藤氏、白岩禮三氏、山本兼茂氏等が呼びかけて発足したもので、会場も、当初、伊藤氏が勤務していた虎ノ門の日鉄鋳業のクラブ、その後、サッポロビールの故加茂和正氏の肝いりで、恵比寿ウエスティンホテル、今は、高崎氏のお世話で、新日鐵の代々木倶楽部を利用している。

発足当時は、年齢も五十の半ば、皆、会社に於いては、それぞれ責任ある立場に立って居た頃の話である。

その頃の話は、企業情報と云うか、自分の属する業界の事情とか、やはり仕事絡みの話が多かった。

メンバーは、当初、東京在住の同期生中心だったが、年を経、東京勤務のあとリタイヤして、関西、四国、九州へ帰った人々も、今は時間を割いては、東京の会に集まってくれる様になっている。

今、九友会の会合は、新年会も兼ね、大体、一月末に行われ、約二十名前後の人が集っている。

### ～喜寿を迎えた今の九友会～

リタイヤしてはや十五年、卒業して半世紀ともなれば、今は、皆、これ、サンデイ・マイニチ、喜寿とも成れば、いいジーさんではある。

近頃の話は、もう仕事関連の話は無くなった。学校時代の話も、グループが違うと、交流も少なく、今共通の話題とは成りにくい。さすれば、古希も過ぎた頃から、共通の話題は、まあ、ビョーキの話となって来る。

かく言う私も、六十八歳の頃、肝臓ガンになり、それから、三年間の間に、四回の入退院を余儀なくされた。その頃は、概ね、皆、元気だったが、私が、ガンの話を、オープンにしたら、不思議な事に「俺もガンだ」と名乗る人が増えてきた。まずは、私の肝臓ガン、それと、榎彰氏が胃ガン、加茂氏が肺ガン、さすれば三人で「九友会；ガン友の会」を作ったら、その後、続々と病人が、名乗りを挙げてきた。黙っては居たが、具合が悪いのは、オレだけではないと、思ったのである。

今や、前立腺ガン、大動脈瘤、心臓のステント、糖尿病、耳下腺腫瘍、眼底出血、骨折、その他、諸々の症例の発表が相継いで、一病息災が当たり前の世界となっている。最近のトピックスは、不死身のカネシャン（山本氏）が、前立腺ガンにかかり、最新



2009年1月 東京例会

後列：長尾、福岡、高崎、山本、田中誠、森、伊藤、榎  
中段：長尾／白岩夫人、白岩、小山、松重、胡居、古市、貞包  
前列：久原夫妻、田中貞輝、吉橋夫妻、加來、財津、藤原の各氏

鋭の重粒子線治療を行なった件。これは、新技術で、まだ、健康保険の認可が取れていず、自費でやると高額だそうで、この新技術の説明、また、費用自弁の為、ガン保険に入った方がいいと、エンエンの講釈が始まった。聞くところによると、山本氏の先達として、高橋栄寿氏がすでに、重粒子線治療経験があり、山本氏も先達が居て安心だった様だ。彼もようやくガンになったので、晴れて仲間に入れたのである。驚くことには、大阪の元気印、胡居敏明氏が、ほぼ同時に前立腺ガンが見つかったとのこと、どうも前立腺ガンは元気な人が罹るものと、立証された様である。腰痛、高血圧、糖尿病予備軍は、数多く、コレ、今では、病気の内には入りません。しかし今年の加来暉敏氏の腰痛は、ヒドイもので、畳に座るのがナンギとか申していましたが、それでも、ゴルフ場ではスツキリとプレイして居るらしく、フシギな事と思っていました。

しかし、ちょっと前に、狭心症、且つ、大動脈瘤の八時間に及ぶオペを経験した貞包明氏は、なんとゴルフに行ったら、チャンと廻るどころか、スコアが九十を切るのは普通というので、コレデ、ナニガ、ビョーキよと言いたくなります。で、ガンとゴルフとは、関係がない、これが、皆の常識と成りました。

山本氏も当然、退院後、すぐゴルフに行くは、麻雀はやるは、退院後の激励会の帰りにコテンパーにやられた高崎氏は「コノ恩知らず！」と嘆いていました。高崎氏は、先般、親友の加茂氏を亡くし、カネシャンの事をシンパイしていたのです。しかし、義理堅いカネシャン、その後、引き続き狭心症のオペをして、九友会のリーダーの席を譲りません。その他、小山富士男氏の三週間に及ぶ眼底出血のオペ、本人は気が付かず、免許書き換えの為検査したら右



目が見えず、再検査に行ったら即入院だったそうです。更に、田中誠氏は、耳下腺腫瘍といって頬の当たりに腫瘍が出来、それを取り除くオペをしました。

しかるが左様に、皆、この歳になったら、誰でも、何らかの疾患を持って居り、たまに何の病気もないと言う不逞の輩が居たら、それはコンジョウがワルイと言われていました。

今や、ハードの不調はアタリマエ、でも、九友会に出たら、何らかの対応策が見つかります。

病み上がりの人は、介護人（奥さん）を同伴して、この会に出て参ります。緑内障で目が不自由になった久原篁男氏は、常に奥さん同伴、その介護ぶりが、素晴らしく、皆から貞女の鑑と尊敬の眼差しを受けていますが、私とか、榎彰氏も、オペ後はしばしば家内と同伴出勤を致しました。

もっとも、これは、病み上がりの亭主が悪友に嫉まれて、飲み過ぎない様にとの事情からでございます。(九友会では、ノミスギ、アソビスギは、アイツの所為と言われている人が多く、奥方族には、九友会はアクの巣窟となっています)。常時、奥さんと共に居る久原氏は、隣の席を意識しつつ、徳利睨んでは「ダレカ、スコシハ、ススメンカイ」と目配せをしています。でも、先般は可哀想にも、コレデ、オシマイ！と奥さんにオコラレテ居りました。

吉橋昭男氏は、常に長老として、リーダー役を兼ねています。吉橋氏と同じく、大阪に居る林敬三氏と今回、叙勲に輝いた下川浩一氏等は、現役入学組から見ると、四、五歳年長、学生時代は、これ大きな差でした。吉橋氏は「ここまで来たら、もう皆と同じよ」と申しますが、既に傘寿、会の最初の挨拶は「まず長老から…」で、始まります。

喜寿を過ぎて、白岩禮三氏は、モウ・タイテイニシタラ、と言われながらも、まだ現役で、評論家の仕事を継続中、しばしば労作を配ってくれます。独自の世界観で、今の産業界の現状をユニークな舌鋒で論破しますが、このエネルギーは、日々ニキロの水泳と、今でも飢えたライオンの如くステーキをバリバリ食べる生活からもたらされます。

榎氏も、カーちゃんから八十迄頑張れと尻タカレ、まだ週に一回の大学の講師を務めています。その他、藤原澄人氏も、今も公認会計士として現役活躍中。この歳で、まだ枯れずに、やっている人も居るのです。

只今、一番元気なのは古市敏朗氏、今は、奥さん指導の太極拳の補佐をやって居て、健康の秘訣は、体温を上げて免疫力を上げ、重めの靴履いて歩くこ

とだそうで、長芋、生姜を常用し、今は、体力テストで56歳と言われたと豪語し、腰回りも88から78になったと申して居ます。現役時代は、株はドウノとか、蘊蓄を傾けて居ましたが、今はサマ変わりと相成りました。

その他、奥さんが具合が悪く、そっちの介護で、ご無沙汰している人もあり、この歳になると、多事多難、やはり、この五十年は、大いなる変化の時期でした。亡くなった人も、幾人か出てきました。ずっと前に、藤村、田代氏、それから、近々では、鶴、加茂の各位です。

なんだか、いい人が、先に逝く様に思われます。だから、適当に逝かないと、最後に残った人は、サビシイぜ、と脅す人もいます。

九友会のメンバーも、今年は喜寿、あと三年で、八十路になります。その頃は、多分、ボケ予備軍と成っていて、この九友会が、無事続けられるか、予測は、かなり難しいのであります。

しかし、地方から出てくる人は、大体、超元気、まあ、彼らが来たら病気の話も出るが、旅行談、趣味、ボランティア活動とか、元気付けられる話題が多くなります。

大阪の胡居氏は山歩きが大好き、公園整理ボランティア、木樵のボランティアをしていましたが、昨年はギックリ腰から、肋骨、手首を骨折し、今回は、更に、前立腺ガンと相成りました。

九州から参加の財津訓氏は、飄々と上京しては、近代文学の研究とかで、国木田独歩がどうか言いながら、先般の東北の旅は、混浴の乳頭温泉がいいとかケムリに巻いていました。福間一弘氏は、男性コーラス部で活躍中とか、かような高尚な趣味を持つ者は、東京には居りません。



2010年 北九州 九大経済学部卒の各位、卒業五十年を過ぎる九友会  
後列：井上、荒谷、則行、梅田、福間、原田  
前列：平賀、富永、財津、逢坂、手島、江島の各氏

その他、四国の田中貞輝氏は、既に、前回の同窓会レポートで紹介されている如く、実家の古文書の解説と『高山浦幕末覚え書』の労作を引き続き発表されました。

ご母堂の介護のため、帰郷した井上俊二氏は、平賀雄一郎氏のサポートで、北九州の会を運営していますが、遊びのゴルフとなったら梅田則之氏の出番と言います。

東京からの帰郷組、荒谷八州郎氏、富永一彦氏、及び九州在住の逢坂充氏、手島一男氏各位の様子も、折にふれ知らせてきます。

井上氏から、送ってきた北九州組の写真を見て、東京の連中は「ミナ、ジーサンニナツタナア」と言いますが、あっちでも、同じ事言っている事と思います。

でも、もうすぐ、皆、八十路、インドの教えに依れば、最後の遊行期で、その時は、身一つで、荒野を彷徨い、世事に関するあらゆる執着を断って解脱に至るが良いと言われていました。

今のところ、まだ、皆さん、サトリの域にはほど遠く、ケンケンガクガクと麻雀に励み、ゴルフをやっつては、「コノ、バカチン！」と楽しくやっている様です。八十路の九友会、果たして、存続しているか、黙って周りを見回したら、マア、この連中なら続くだろうと思っています。

## リレー随想

# 過去を振り返り、将来を想う



菊池 武成氏

1963(昭和38)年卒

2005(平成17)年修士修了

今年6月4日に開催された福岡支部同窓会の折に、福留久大先生から執筆の依頼を受けた。固辞したい気持ちであったが、6年前社会人大学院生として先生の授業を受け、単位をいただいたこともあり、辞退するわけにはいかなかった。駄文をお許しいただきたい。

## (1) 経済学部時代

経済学部在学中は、現在の校舎が新築中で、旧法



感激の瞬間  
昭和38年3月 高木暢哉経済学部長より卒業証書授与

文学部ビルと新館と両方で授業が行われ、授業毎にかなりの距離を歩いて移動したことを覚えている。ゼミは金融論の岡橋保先生で、先生の研究室は旧法文学部ビルにあり、落ち着いたただずまいの研究室で、いつも笑顔を絶やさず、低めのお声での解説に耳を傾けた。ゼミ生は4人だったので発表の順番が早く回って来ることもあり、サボるわけにはいかなかった。

ゼミのテキストは、当時岡橋先生と大阪市大の飯田教授の間の信用貨幣論争をテーマにした本であった。当時の経済学部はマルクス経済学全盛の時代で、貨幣論、金融論も労働価値説を前提にしていた。貨幣は本来“金”以外にはあり得ないという視点から、現代の信用貨幣を考察するという流れになっていたと思う。

当時、板付基地から飛び立つ米軍のゼット機の爆音は凄まじいものがあった。上空を飛ぶ1分間ぐらいは教室で隣に座っている友人の声が聞き取れないぐらいであった。

## (2) 銀行員としての会社生活

就職先は製造業を考えていたが、金融論のゼミだったこともあり、1社限りと決めてA銀行を訪問したところ、内定をもらい、前以って自分の設定した基準にも合致していたので、銀行員としての会社生活スタートすることになった。

銀行員として各地の店舗に勤務したが、融資の仕事が比較的長かった。融資の仕事を通じて多くの企業の経営の事例を学ぶことができ、勉強になった。特に新規融資先の開拓には力を入れたが、いつも審査部が立ちばかり、苦勞した。自分としてはその企業の将来性についてデータを分析し、経営者にも

面会して自信がある先は押しまくった。もしその先が倒産したら銀行に辞表を出すからと言って、審査役に認可を迫ったこともあった。少しオーバーな表現かもしれないが、体を張った仕事で楽しかった。

1970年前後は日本の銀行が海外業務の展開を本格的に開始する頃に当り、支店で営業の第一線で汗を流していた私に、海外要員の養成をどうするか、その企画をせよということになり人事部配属となった。予算も青天井に近いからつけてもらい、自分としては納得できる制度を作り上げた。社内の各部署から若手の社員を3年間で60名ほど引き抜き各人1年～2年かけて養成した。

### (3) 経済学府大学院へ社会人入学

46歳の時食品小売の企業へ出向して勤務していたが、62歳になって急に思い立って、九大の経済学府大学院へ社会人入学した。大学院では塩次喜代治先生の指導を受け、修士論文は「組織マネジメントの実践指針」という題目で、経営失敗の研究が主要な内容だった。入学した途端に毎週論文検討会が行われ、今考えると冷や汗ものの論文に四苦八苦しなから取り組み、なんとか仕上げた。

### (4) これからの経営者育成について思うこと

#### ①経営は論理、人は心で動く

私の考えでは、良き経営者の要件は、2つに限定してもよいかと思う。1つは、ものごとを論理的に段階を追って考え、冷静な判断ができること。もう1つは、人の心の痛み（悲しみや悩み）がわかることである。

昭和38年3月27日  
九州大学卒業式の時、  
医学部講堂にて



経営とは人に動いてもらって所定の成果を達成することであると言ってよいだろう。まず経営は経営環境の現実を深く理解することから始まる。深く理解するためには、経営者自身のものの見方がどれほど練り上げられているかからスタートする。次に環境に対応するためにものごとを分析し、組織をつくって環境に対応する。組織は人間で構成されているので、人間関係を良好に保って協働の力を引き出さねばならない。日本の企業は特に人間関係（仕事を任せること、精神的な報酬など）が大事で、集団の力を重視する必要があるように思われる。日本の企業では、経営者の考えをとことん理解すれば、そこで働く人々は文句なしについていく。

#### ②グローバル経営時代の経営者育成

日本企業のビジネスはかなり国際化してきた。しかし、グローバル経営という視点で眺めると心配な点もいくつかある。

イ、日本以外の国の人々の思考の枠組みを理解し、評価する経営システムになっているか。

(つまり、日本人の会社であり続けようとしていないか)

ロ、海外の現地の制度や固有の情勢も広く知っている社員を育てようとしているか。

ハ、経営者の語学力をレベルアップさせる必要があるのではないか。(日本語、英語、プラスもう1ヶ国語を現地の人と対等に話せる程度)

これからの企業経営はグローバルな視点を持ち合わせていないとうまくいかない。国内だけの発想では、ローカル企業になってしまう。日本人だけで固まり、国内の発想だけではやがて行き詰る時が来るにちがいない。と言っても、日本型の経営はしっかりと守り続けるべきだと思う。欧米流の経営を日本の企業が導入しても失敗するにちがいない。

欧米の経営者は利益への近道を選ぶ。短期間で利益を拡大できる分野にシフトする。日本の企業の進むべき方向は違うと思う。時間は長くかかるがモノづくりの力を磨きあげ、新技術の研究開発力を強化する方向だろう。それは長期的な雇用保障とそれを担保に従業員が差し出す忠誠心に大きく依存している。

今年5月で70歳になった。なんとか元気でまだ働いている現状を大切に長く維持したいと思う。



## リレー随想

## 学生時代の思い出



関西支部副支部長  
久保 隆二氏  
1974(昭和49)年卒

### ■同級生に誘われ大阪から九大受験

私はもともと大阪生れの大阪育ちで、出身高校は大阪府立北野高校である。その私が何故、九大を受験したかといえば、高校3年生のときに岩城志郎君という同級生に誘われたからである。彼の父君が福岡から大阪に転勤。岩城君の高校入学後、また福岡に戻られたため、彼一人が大阪で下宿生活をしていた。ご家族の住む福岡に戻りたいが、ついては一緒に九大を受けてくれないかと頼まれ、何も考えずに「いいよ」と答えた結果である。

私の親も担任もびっくりして志望校の変更を勧められたが、そのまま受験。無事合格して、1970年(昭和45年)4月に経済学部に入學、1971年(昭和46年)10月、2年生の後期から箱崎の経営学科に進み、1974年(昭和49年)3月に卒業。大阪に戻り家電メーカーに入社。最初に人事畑に配属され、それから2009年3月に退職するまで、途中で会社は二度変わったが、ほぼ35年間、ずっと人事畑で過ごした。

現在は、石橋支部長の下、経済学部同窓会関西支部副支部長として同窓会のお手伝いをさせていただいている。

### ■原田實ゼミのこと

実はこの原稿を頼まれたとき、困ったなと思ったのが本心である。私は、あまり真面目でない典型的な文系型学生で勉強やスポーツなど何かに打ち込むでもなく毎日ぐうたらしていたので、特に皆さんにご紹介できるほどのこれといったエピソードもない。4年間で取得した単位もキッチリ必要最低限の単位数だけで、1単位たりとも余分な単位は取っていないというのが唯一の自慢である。ただ、学生時代は同級生と徹夜でよく議論したものである。それが社会に出てからの考え方や判断基準に多少は影響しているとは思っている。



2010年7月 妻と孫と3人で北海道旅行

そういう中で書けることといったらゼミ時代のことぐらいであるが、それもそれほど真剣にゼミ活動に取り組んでいたわけではないので、あまり記憶にないというのが本当のところである。当時、私が所属していたゼミは原田實助教授(現・名誉教授)の労務管理論で、テキストにはモーリス・ドップの『賃金論』を使っていたと思う。就職活動中の面接で丸暗記した一節を滔滔と述べ、採用担当者からよく勉強されていますねと感心されたこともあった。3年次のゼミ論文は適当に書いてお情けで優をいただいた。それに味を占めて4年次にも同じことをやったが見事に優はもらえず可の評価。人生そんなに甘くはなかった。

夏のゼミ合宿が九重にあった九大山の家で行われたことがあった。1年生のときに入っていた六本松の学生寮も古かったが、山の家も相当に古い建物であった。そのゼミ合宿の前に突然、原田先生が何かの拍子に腰を痛められ、合宿中は歩くのも困難という有様であった。それで学生何人かで交替で先生の腰のマッサージをやったという思い出が残っている。少しは楽になられたご様子であった。

そもそも経済学部の私たちの学年には女性が一人もいなかったが、4年生になったとき3年生の女性が原田ゼミに参加してこられた。当時の原田ゼミにとって唯一の女性で、今は大分県大阪事務所長を務められている関さんという方である。同窓会関西支部理事の佐藤さんとは大分舞鶴高校の同窓生ということで、先日の理事会の会合でそのことが分かって世間は案外狭いものだと驚いた次第である。

### ■大屋祐雪先生のこと

九大に関して強く印象に残っていることがもう一つある。それも、在学中のことではなく卒業してからのことである。

4年生の後期に大屋祐雪教授のドイツ語の原書講読を受講した。毎回全員指名されて訳さなければならぬので、それが苦痛でそのうち授業をサボるようになった。それが祟って、試験はまったくわからず必須科目にもかかわらず不合格。大屋教授から下宿に電話があり、落第するかといわれた。しかし就職が内定しているなら税金の無駄遣いになるから卒業しろ。ついては追試として課題を出すからと言われ研究室まで受け取りに行った。院生から手渡された課題は、東ドイツの統計局から出た最新の報告書で訳本はまだないので探しても無駄とのこと。下宿に持って帰って徹夜で訳し、翌朝、郵便局に行って速達で出し、また翌朝までかけて訳す。それを10日間余り繰り返した。課題終了後、教授からまた電話があった。レポートを最後まで出したのは君だけとのこと。あとで同級生に聞いたところ学生課に確認しに行ったら既に合格になっていたので提出しなかったとのこと。要領の悪さは昔からで、それでだいぶ損をしている。そういえば六本松の教養部時代、ある新聞社の世論調査のアルバイトで柳川の町を夏の猛暑の中、てくてく歩いて調査に回ったことがある。私が担当した地域は同じ苗字の人が多く捜すのに苦労した。断られても何度もお願いしに行きやうと回答してもらった方もある。ところがあとで同じアルバイトをした連中に聞いてみると、指定された現地には行かず西鉄の天神駅前で手当たり次第に通行人に頼んで答えてもらい簡単に済ませてしまったとのこと。彼らに言わせると私は頭が悪いようだ。

それから社会に出てレポートのことはまったく忘れてしまっていたが、卒業してから26年後の2000年7月、突然、大阪府阪南市の私の自宅宛に大屋先生からのお手紙が届いた。学生時代、追試で提出したあのレポートも同封されていた。先生のお手紙には、ご定年退官後、書斎の資料整理をしていたら当時の私のレポートが出てきた。学生時代の思い出の記録になるだろうと思い送ることにした。いろいろと関係者に私の住所を調べていただき、最終、同窓会関西支部理事の跡部氏から私の住所を聞いて送ってくださったとのこと。久しぶりに見たレポートはB5版用紙40枚で先生の手によって丁寧に綴られてあり、用紙も色褪せずにきれいなままであった。細かい文字でびっしり書いてあったが訳し方や文章は稚拙で、今では赤面する内容であった。単語の意味が分からず訳せないという言い訳じみたこともたくさん書き込まれてあった。その翌年に開催された同窓会関西

支部総会で大屋先生にお会いしていろいろとお話させていただいた。レポートは今でも大切に手元に残してある。私にとって学生時代の良き思い出の記録である。

## リレー随想

### 同期の同窓会

### 「さよなら六本松」を振り返って



関西支部事務局長  
中野 光男氏  
1975(昭和50)年卒  
(西村ゼミ)

平成21年3月20日に六本松キャンパスで撮った写真がある。昭和46年に入学したL1-11組(経済学部)のメンバー(以下敬称略で中家、中楯、中野、中原、中村(博)、西嶋、浜中、原岡、原田(万)、平川(紀、旧姓中川)の10名、写真を撮影した中楯君本人は写っていない)に加え、他の組からも4名(沖永君、加藤君(以上経済学部)、重岡君、湯田君(以上法学部))が参加して、同窓



平成21年3月20日 六本松キャンパス  
後列左より：浜中、重岡、湯田、加藤、中村(博)  
中列左より：原田、原岡、沖永、平川(紀、旧姓中川)、  
前列左より：中原、中家、西嶋、中野の各氏



会をやった。肌寒さも残る中、さくらが咲き始めた絶好の行楽日和であった。

その前年の11月22日（土）に、私が同窓会関西支部の事務局長の立場で、六本松キャンパスで開催された「第3回ホームカミングデー 2008」に参加したとき、翌年3月いっぱい六本松キャンパスが閉鎖になることがわかり、同期の連中に声をかけたことが発端である。

そもそも昭和50年卒業のL1-11組の有志数名で在学当時担当教官であった川口武彦先生を囲む会「那の津会」を結成したのが同期の同窓会の始まりであった。実際は川口先生を囲むよりも有志数名で集まる方が多かったようだ。場所も東京、大阪、神戸、福岡と何かと集まる口実を見つけては放談会を開いていた。

川口先生が亡くなってからも、交友は続き、やがてその輪は広がり、いつしか「賢人会」と称して、20数名を擁する規模となり、毎年何人かがどこかで集まっては飲んだり議論したりした。そして、久しぶりの六本松での同窓会。平成21年3月20日（春分の日）の午後4時に九州大学六本松キャンパス正門前に集合し、懐かしい学舎や「亭々舎」などを巡り、記念撮影をし、午後6時から場所を変えて懇親会を開催。同じL1-11組の中尾君、箱崎君ら3名も加わり、総勢17名で旧交を温め大いに盛り上がった。飲み放題のお酒も空っぽになるくらい飲んだようだ。ちなみに、翌日は6名が伊都ゴルフ倶楽部でゴルフを楽しんだ後、キャンパス移転先の伊都キャンパスに足を伸ばした。

問題になったのは懇親会をお願いしたホテルで、案内看板は「賢人会」。どういう人が集まるのかと周囲の目が集中していた。その人達の視線を感じな



平成21年10月21日開催の「健人会」  
後列左より：平川（憲）、中家、西嶋  
中列左より：富井、原岡、中野、中楯  
前列左より：沖永、中村（博）、平川（紀）の各氏

がらちょっと気恥ずかしさを感じた仲間もいて、会の名前を変えたらどうかという緊急動議もあり、賛否それぞれだったが、後日、中家君から提案のあった「健人会」でひとまず落着。

この「健人会」は「会」が付くものの会長は置かず、それぞれ開催地で世話人が面倒を見る。世話人も自薦他薦に関わらず自主的にやっている。このたびの福岡での開催は中原君が面倒を見た。次は東京でやろうと言うことになり、その年の秋10月21日は新橋で沖永君が面倒を見た。暮れの12月18日（金）は東京・赤坂で懇親会を開催したが、手を挙げた平川（紀）君も場所の手配をした中村（博）君も都合が悪くなり急遽再び沖永君が代役。そのとき中楯君が持参した昭和46年11月当時の若き青春時代の写真がある。多分ソフトボールの試合が終わった後の集合写真だが、ちょうど昨年春に撮ったさくらと同じ場所かも。他にも筑女短との合ハイの写真もあったが差し障りがあってもいけないので、この1枚だけ掲載する。L1-11組の連中（後列左から順に敬称略で、野瀬、中川、平川、中家、原田、原、中楯、中村、林、中列左から南保、中原、原岡、南部（横向き）、前列左から樋口、西嶋、林、寺田、原田（栄））が写っている。それから38年後の写真。10月に集まったのは、沖永、富井、中家、中楯、中野、中村（博）、西嶋、平川（憲）、平川（紀）、原岡（以上敬称略）の10名、12月には中村（健）君が初参加したが9名。今年も私が上京した折、中家君の声かけで6月21日に銀座で10名集まり、また9月20日に福岡へ出張した折には中原君の声かけで7名集まった。10月1日には東京で集まる計画がある。

六本松キャンパスで培った絆を糧に、この集まりは衰えを知らず、みんなが生涯現役の意気込みで今なお進行中である。



ソフトボール試合後 昭和46年11月 六本松キャンパス



## リレー随想

## 追憶:九大大学院で過ごした日々



法政大学経済学部教授

原 伸子氏

1977年(昭和52)年博士入

九大大学院の博士課程、経済学部助手を経て、東京に就職してからはや30年が過ぎた。経済理論学会でたびたびお会

いしている福留久大先生から同窓会報への執筆依頼を受けたとき、改めて過ぎ去った時間の長さ気づかされたとともに、私も思い出を語るような年齢になったのだと、妙にしんみりとした気持ちにもなった。

私は、1975年に九大大学院の修士課程に入学した。当時の同級生は7人。江藤彰彦君(現久留米大学教授)、川本忠雄君(現下関市立大学教授)、久野国夫君(現九州大学教授)、清野良栄君(現松山大学教授)、永田裕司君(現福岡大学教授)、納富一郎君(現佐賀大学教授)、そして私である。今でもよく思い出すのは、同級生と太宰府の宝満山に山登りをしたことである。確か、上級生の西田勝喜さん(現熊本学園大学教授)も一緒だったと思う。頂上を目前にしたところで、江藤君がポケットから携帯用のウイスキーを取り出して「ちょっと飲む?」と言ったので、景気づけのために一杯飲んだ。それから頂上に到着するまでの時間がずいぶんと長く感じられた。また、同窓会報第46号で川本君が書いていた米一丸のバス停通りにある屋台、リエちゃん(店主)の「リエレストラン」にもよく通った。ラーメンを食べながら、(大学院の誰かが)キープしていた焼酎を飲んだりもした。

その後、1977年には7人全員、博士課程に進学した。研究者を志すと決めながらも、ぼんやりとした将来に向かって不安な気持ちになっていた私たちにとって同志である仲間の存在は大きかったと思う。ただがむしゃらに勉強して、そして多いに語り合った。その後、皆で集まる機会がなかなか作れないままであるが、1998年にケンブリッジ大学留学のさいに、ロンドン大学SOASに留学中の川本君が友人とともにケンブリッジを訪ねてくれたのは嬉しかった。

「昔と変わってないね」とケム河のほとりを歩きながら語り合った。

大学院の指導教授は都留大治郎先生であった。当時、私の出身校である佐賀大学経済学部から九大経済学部へ赴任されたばかりの宮川謙三先生からも共同でご指導いただいた。ゼミは、スミス、リカード、マルクスや、シュンペーターなどの古典を丹念に読むというスタイルであったが、その一方、熊本県菊陽町のマスタープランにかんする調査などにも同行した。菊陽町では調査のあとで、何度か、名物の馬刺しがメインの会席を準備していただくことがあったが、都留先生は「馬なんか食べる気はないよ」といって、私の膳にそっご自分の料理を移して、お酒ばかり飲んでおられた。また都留先生とともに、学部ゼミの指導に当たることもあった。学部には当時、深川博史君(現九州大学教授)や安高優司君(現九州産業大学教授)も在籍しており、大所帯で賑やかだった。また当時私は、刊行が開始されたばかりの新MEGA(*Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe*)の中の新たな『資本論』草稿を読み続けていた。都留先生はそんな私の関心に合わせて、『哲学の貧困』や『経済学批判要綱』などもゼミで取り上げて下さった。私の最初の研究成果は、当時の九大産業労働研究所の『産業労働研究所報』に掲載された都留先生との連名論文である。この論文を見るたびに、都留先生との交流や大学院時代の私の初心を思い出して、熱い思いにかられる。

宮川先生にもお世話になってばかりであった。優しい風貌と穏やかなお人柄なのだが、ゼミでの私のいくぶん抽象的な発表に対しては、理論と現実との関係を忘れないように、発展性のある議論を展開するようにと、鋭い指摘をいただいたこともある。先生とは東京で時々お会いする機会もあり、「からしめんたい」のおみやげをいただいたこともある。2001年の経済理論学会全国大会(駒沢大学にて)の私の報告を聴きに来てくださったのが、お会いした最後であった。先生のお嬢様の近況などをお聞きしながら新橋まで一緒したのが、今は懐かしい思い出である。

大学院で私にとって欠くことのできないもう一つのゼミが、逢坂先生の経済原論のゼミである。ずっと『資本論』を読んでいた。恐慌論の九大学派の基礎を徹底して学ばせていただいた。穏やかな論調ながら、決して屈することのない理論家だというのが、先生に対する私の印象である。先生の夏の合宿は、大分の筋湯にある九大山の家に行くことが多かった。

私もほとんど参加させていただいており、筋湯の曲がりくねった道をバスに揺られながら先生の青春時代の話をお聞きしたことが懐かしい。先生は油絵をたしなまれていて、研究室には当時、奥様の姿を描いた絵が飾られていたように覚えている。今でも毎年、先生ご自身の版画刷りの年賀状をいただくのが楽しみである。

私も研究者の道を歩むようになった。また学部学生や院生の教育にもあたっている。そんなとき、いつも頭を過ぎるのは恩師の姿や言葉であり、大学院時代の私の初心である。

## リレー随想

# 保険学講座の思い出



西南学院大学商学部教授

旧教員

小川 浩昭氏

私は、1995年4月から2年間保険学講座の客員助教授として、九州大学経済学部でお世話になりました。保険学講座

は安田火災海上保険（現損害保険ジャパン）の寄付講座であり、公募で教員が募集され、保険会社の実務家が採用されました。保険会社を退職して出向した2名の教員が2年または3年の期間担当し、1987年10月から2001年3月まで開講されましたが、私はその4代目です。保険学講座については、同じ4代目の中出哲先生が昨年本誌において紹介されているので、詳しくはそちらをご参照ください。

1995年というのは大変な年でした。1月に阪神淡路大震災、3月に地下鉄サリン事件、4月に1ドル80円割れのドル安＝円高（今年の円高はその時以来15年ぶりの円高水準です）を記録した年です。日本の安全神話が崩壊した年といえます。阪神淡路大震災から数日後初めて九州大学経済学部に向いました。前任の方の最終講義を拝聴し、引き継ぎを行うためです。機会があれば本格的に研究してみたいと思っていたので、九州大学に行けることが決まって大喜びでしたが、胸がわくわくするはずの初めての九大行きは、何となく慌ただしさも感じました。地

下鉄サリン事件の3月20日は、九大行きの挨拶回りをするために地下鉄に乗っていました。地上に上がると消防車、救急車がたくさん出ていて大騒ぎでした。あと30分早く地下鉄に乗っていたら、自分も巻き込まれていたかもしれません。

世間がオウム真理教の話題でもちきりで、1日中テレビで報道されている頃赴任しましたが、早々に「保険経済」週2コマを担当することになっていたので、大騒ぎのテレビなどを見る余裕もなく、講義の準備に追われました。今まで講義をやったことのないものが、いきなり1コマ100分を週2コマ行うわけですから、1日10時間以上は準備に費やしたと思います。損害保険会社に勤務していたとはいえ、入社以来一貫して資金運用部門に所属し、保険を扱ったことがなかったので、実務の知識に基づいた話をするということもできませんでした。まず保険についてのテキストといえるものを片っ端から読んで、必須項目、およその体系などをつかんで、20数回の講義の流れを決め、各回の講義を自転車操業のようにこなしたのが、今では懐かしい思い出です。自分の人生における大変な仕事の3本の指に入るぐらい大変でしたが、保険の基礎的な勉強を必死にやったことになったので、このときの勉強が後に大きな意味を持ちました。

必死に講義の準備をしましたが、大変下手な講義であったと思います。それでもそれなりに理解する九大生というのは、大変優秀であると思います。ゼミナールももたせてもらいましたが、非常に前向きな学生が多く、授業が1時間ぐらい伸びるのは当たり前でした。特に、初年度のゼミの学生に熱心な学生がいて、ほぼ毎日いろいろな質問をしてくれます。先生だから答えられなければ恥ずかしいと思いつつも、難しい質問も多く、すぐに素人先生だからと聞き直って、しばしば「わからない、後で調べて回答する」と答えました。この学生の千本ノックのような質問には大変鍛えられました。また、非常に優秀な学生が集まってくれたので、2年目はゼミで論文集の発行に挑戦し、全員が力作を書いてくれました。

赴任早々は自転車操業のような苦しい展開でしたが、講義は週3-4コマしかなく、学内行政からいっさい解放されているのですから、こんなに恵まれた環境はなかったと思います。素晴らしい環境の2年間はあっという間に過ぎるでしょうから、何とか充実させることができるよう、少なくともだらしなく目標を立てようと思いました。何にしようかいろいろと迷ったのですが、単純な量的目標を

置くことにしました。1か月1万字、2年間で24万字の論文を書くということを目指しました。アウトプットの目標を達成するためにはそれなりにインプットせざるを得なくなり、講義にも繋がるのではないかと考えました。サラリーマン時代は1年間で2万字書けるかどうかだったので、恵まれた環境を手にしたとはいえ無謀な目標ではないかと思いましたが、終わってみると50万字近いアウトプットができました。九大の2年間で論文を書きまくった形ですが、つくづく自分は論文を書くことが好きなのだと自覚しました。特に、会社にいるときは、論文を発表する場を確保すること自体が困難であったのに、生命保険や社会保険など損害保険以外の好きなテーマでも伸び伸びと書いてそれが活字となる、とても楽しく、夢のようでした。

そろそろ会社に戻ることを意識し始めた1996年12月に日米保険協議が決着し、損害保険業界が自由化されることになりました。覚悟して社に戻ると、久し振りに戻る逆カルチャー・ショックも加わりながら、これが自由化なのかなと感じました。自由化にIT化も加わって、仕事の進め方自体が大きく変わる時期でしたが、資金運用の企画セクションに配属され、リスクの計量化を中心とするリスク管理体制の構築という仕事を行いました。九大に行かせていただいたご恩返しをしなければと、必死に働きました。勉強も続けて論文も書いていましたが、九大に行く前に比べれば自由度が高まったとはいえものの、いろいろな制約がかかってくるのがとても悲しく感じられました。そこで、一応の体制作りを目途をつけたところで、大変勝手ながら、好きな論文を書いて飯を食っていききたいということで、大学教員に身を転じることにしました。早いもので、それから10年が経ちます。

恵まれた環境の中で九大の先生方にご指導いただきながら、学生諸君に鍛えていただいたおかげで、今日の自分があると感謝しています。また、九大に行かせてくれた会社、会社関係の方々にも感謝しています。波乱の人生に巻き込んでしまった家族にも感謝しています。改めて、当時お世話になった方々にお礼申し上げます。

(元日産火災海上保険財務企画部企画課長)

## リレー随想

# 博多の女のおもてなし ～南蛮往来



JTB (澳門) 旅遊有限公司

木林 美津子氏

2003(平成15)年卒

1570年、長崎開港。出島に貿易に訪れていた南蛮人は、マカオに住むポルトガル人でした。そのせいかマカオには、

長崎街という通りがあります。皆さまはご存知でしたか？わたくしは初めて聞き、嬉しい驚きを感じました。大航海時代、ポルトガル人は「リスボン～マラッカ～ゴア～マカオ～長崎航路」により潤いました。さらに見つけたマカオと長崎の共通点は、坂が多いこと、中華街と天主堂が共存すること、です。さらに東京や香港と違い、マカオには九州のような実にゆったりとした時間が流れています。

マカオでは、東西文化のユニークな同化と融合をご覧頂くことが出来ます。世界でも貴重な文化的伝統を後世に残すべく、マカオ歴史地区は2005年ユネスコより世界遺産に登録されました。マカオは香港からフェリーで約1時間の距離にあります。面積は伊都新キャンパスの約10個分、29.2平方キロメートルです。マカオ半島内なら歩いて回れるほど、コンパクトなところが魅力です。母校の福岡高校からキャナルシティまで、また六本松の旧教養部から天神まで、徒歩20分程度です。マカオなら、この20分間に世界遺産を20カ所訪れることが出来ます。

大学時代は、サークルの先輩から素晴らしい先生だよと知恵を授けて頂き、福留ゼミを受講しました。福留先生は噂に違わぬ教授で、穏やかに笑みを絶やさず、学問に励むわたくしたちを優しく導いて下さいました。わたくしが春休みのゼミ更新日を知らず、教室に現れなかったときなど、おっちょこちょいなわたくしに「今日はどうしましたか？更新しておきましたよ」と電話を下さるほどでした。

卒業してからは、中洲川端のホテルオークラ内にある旅行代理店JTBで販売を経験後、上京します。学士会館で開催された七夕のビアパーティー会場で、先生との再会が叶いました。恩師の笑顔は在学中と



変わりなく、一瞬で大学時代に戻ったかのようでした。マカオで仕事をする事が決まり、報告しましたところ「小林さんの珍しい活躍をみなさんに紹介したい」と、リレー随想への寄稿を推薦して下さいました。若手のわたくしにとりましては身に余る光栄です。このような貴重な機会を与えられたことに、心より感謝申し上げます。

現在はマカオでJTB専属ツアーガイドとして、日本からご旅行にいらっしゃるお客様をお迎えしています。ご来澳の際には、**きばやしみつこと**ご指名ください。先輩方の思い出作りのお手伝いをさせて頂きたく存じます。

わたくしは、便利で、清潔で、暮らしやすい日本を飛び出し、マカオを人生の舞台に選びました。わざわざどうして?と思われる方もいらっしゃるでしょう。最大の魅力はやはり、これからの伸びしろにあります。新しい建物が次々に建ち、開発が進んでいく様子は活気があり、将来性を感じます。現在、来澳されるお客様の80%は中国人です。ここでも中国のパワーを体感しています。来たる10年のために今から中国語を学んでも遅くないと、10年ぶりに中国語のテキストに立ち向かい、チャレンジ精神で新しい暮らしに臨んでいます。

わたくしは、こうして海外で母国語である日本語を武器に仕事出来ることに、誇りと喜びを感じています。マカオの公式表記はポルトガル語と広東語です。地元の商店では英語が通じないこともしばしばあり、日本人にはちんぷんかんぷんに感じられることもあります。そんな中、マカオでの滞在を少しでも安心して気持ちよく過ごせるよう、マカオを好きになって頂けるよう、心を尽くしてお世話させて頂くのがわたくしの務めです。

中国にはパワーと勢いがありますが、日本人には世界に誇れるおもてなしの心があります。細やかな気配りで、真面目に一生懸命働く、日本人特有の感性を以て世界に貢献出来ることは、大変幸せなこと



です。お客様に感謝、感動、関心を伝え、また会いたいと思われる人になるのがわたくしの目標です。日本人のおもてなしの素晴らしいところは、相手の立場で物事を考え、あうんの呼吸でサービスを提案出来るところにあるでしょう。毎日毎回一期一会の精神で、お客様のために自分がどこまで尽くせるか修行中です。どこに視点を置き、どのようにお客様の要望にアプローチ出来るか、いかに満足して頂けるかと、楽しく頭に汗をかいています。日々多くのお客様と接し経験を積み、考え工夫出来ることは、非常に刺激的な経験です。お客様の反応が目の前でわかるのも面白いお仕事です。今後一人の人間として、常にどれだけ努力出来るか、日頃からの姿勢が大切だと学びました。

優れたおもてなしの心を身に付けるために、今後サービス業の頂点、ホスピタリティの代名詞とされるホテル業界に進むことも視野に入れています。その際も先輩方のお役に立ちたいと思います。新たな挑戦に挑むため、現在は本を読み、語学を学び、人の話をよく聞いて、実力をつける訓練をしています。

かつては男性の町というイメージが強かったマカオですが、最近は雑誌やテレビの影響もあり、若い女性グループのお客様も目立ちます。ご家族連れでも熟年旅行でも、それぞれの楽しみ方を提案させて頂ける町になりました。最後に、マカオで皆様の笑顔にお会い出来ることを楽しみにしております。



## リレー随想

## 九大卒業生として



住友信託銀行  
小林 秀章氏  
2006(平成18)年卒

今回、光栄にも「リレー随想」の依頼を頂戴し、諸先輩方には、誠に僭越ではありますが、現在の、私の想いを記述したいと思っている。多少、読み辛い点にご容赦頂ければ幸いである。

そもそも私は三重県出身で、九州大学入学まで、九州地方にご縁は無かった。また、平成18年に卒業後は、住友信託銀行に入社し、松山支店（愛媛県）に配属。そして、昨年より東京営業第六部に所属しており、現在のところ九州に住んだのは、大学在学中の4年間だけである。しかし、九大に通い、卒業させて頂いたことは誇りで、皆様と繋がりを持つことに感謝している。

大学時代を振り返ってみれば、藤田敏之先生のゼミに所属させて頂いていたが、あまり研究等に時間を費やした記憶が無く、恥ずかしながら、アルバイト中心の生活だった。しかし、幸いにも在学中にアルバイトをした二つの企業は、起業間もない企業で、経営者との距離も近く、（ベンチャーであるが故の）アルバイトを超えた「考える仕事」をさせて頂いたことは、非常に勉強になった。特にその内の一つは九大の先輩が2002年に30歳の若さで設立をされた企業（学習塾）で、現在も事業を拡大されていて、私の企業経営者への憧れの元となっている。また、例えば、当時の私も、世の中の10代が悩むように、世の中や生きていくことへの「漠然とした不安」を抱えていた。友人と4年間という長い時間、ただ、人生や生き方について、夜遅くまで語り合ったりしながら考える中で、自らの軸を作っていく時期でもあったと思う。もちろん、彼らとは今でも最高の友である。

そのような背景もあり、就職活動では、漠然と、将来、友人と集まり、何か事業が起こすことが出来ればいいな（事業として成り立つのであればそれ自体、世の役に立っているのだろう）と考え、世の企

業が行っている事業やお金の流れを学ぼうと当社を選んだ。

就職してみると、当社は非常に風通しも良く、自分がやりたいと主張したことにチャンスを与える会社だと感じた。私も当初の希望を聴いて頂き、入社以来（まだ僅か4年半だが）、ずっと「法人営業」を担当させてもらっている。振り出しとなった松山支店では、良い上司、良い同僚そして良いお客さんに恵まれ、様々な経験をすることが出来た。社会人としても成長させて頂き感謝で一杯である。しかし、次第に、日々の仕事に満足して、ハングリーさを失い、努力を怠るようになっていたのではと、今、振り返って感じる。転機となったのが、現在の部署への異動である。現部署では、東証1部、2部上場企業への新規営業を行っている。この仕事で自分の本当の意味での実力の無さを思い知った。

大企業は、組織体系（決定権限）がしっかりしており、なかなか飛び込み営業ではキーマン（意思決定権者）に行き着くのは難しく、出来る限り経営層（役員）の方に接触できるよう努力している。その結果、大企業の経営層の方々と会話する機会には恵まれている。

しかし、まず、アポイントを頂戴することが、大変難しい。お会い頂く為には、まずは用件を伝える必要があるが、国内の金融取引は完全に飽和状態で、ただお金を借りて欲しいというような用件は聞いてもらえない。よって、まずは何か喜んでもらえるような用件（例えば、経営層の悩み、経営上の課題を想像し、その解決に協力すること）を模索しなければならない。

ただ、それ以上に難しいのは、アポイントを頂戴してご面会頂けたとしても、経営層の方と私のような若輩者との間でどのようにして対話を成り立たせることができるかである。私の方から、どうせ自分の力ではどうにもならないと、壁を作ってしまうがちである。それをブレイクスルーするのは苦しいが、それ無しには始まらない。自分も経営層へ提案できることがあると、自信を付けていく努力が必要である（当然ながら、最も難しいのは、結果として、お会いした経営層の方に少しでも興味を持って頂き、名前を覚えて頂くようになることであるのだが…）。

ある大手運送会社の役員の方から、このようなアドバイスを頂戴したことがある。「確かに会社の看板（どこの会社の者か）は重要だが、大事なのは個人。いろいろ会社のことを考えてくれ、よい提案をくれる人と取引したい。年齢は関係ない。若くても、話



していて楽しい相手もいる。また、出来る限り、社内外に自分を支援してくれる人を増やすことも大切。常に自分を磨き、自信を付けるための努力を惜しんではいけない」と。今では、経営者の方の考え方を知り、しっかりとした会話ができるように、経営者の自伝等を時間を見つけて読むように心掛けている。経営層の方との会話では、歴史上の人物の話や、過去の偉大な経営者の話が出てくることが多いと感じる。これは、経営者の方が、過去の人物の経験や教訓から、経営の発想を学ぼうと、勉強をされている証拠だと思う。まずは、少しでも同じ目線を持てるように努力をしている次第である。

先日、経済学部同窓会の東京支部総会に初めて出席させて頂いた。参加の動機は、九大の先輩方から、過去の経験や教訓等をご教示頂ければとの思いからだ。現在の業務に携わっていないければ、出席させて頂くことは無かったのかもしれない。お会い出来た方からは、様々なアドバイスを頂戴するとともに、「困ったら相談に乗るよ」とか、「誰か紹介をし

ますよ」という暖かいお言葉も頂戴することができた。私の同年代の出席者は比較的少なかったが、先輩方の歩いて来られた道を学び、また、同世代でも各々の企業で得た経験等の情報交換をする場として活用させて頂ければと感じた。私も微力ながら、九大の卒業生として、もっと九大を盛り上げていければと感じている。



クラスメイトとのキャンプ（2005年8月）今宿野外活動センター



## 『ASEAN経済共同体 —東アジア統合の核となりうるか—』



九州大学大学院経済学研究院・教授

**清水 一史氏**

(現教員・同窓会理事)

『同窓会報』に執筆させて頂き大変光栄です。『同窓会報』、毎号拝読しています。

また同窓会の理事も務めております。6月の福岡総会とともに、7月の東京総会にも参加いたしました。東京総会では、鹿児島出身の同窓生の方々の席に加えて頂きました。大変楽しかったです。

私は現教員で九大13年目になります。北大出身で

北大の助手から1998年に九大に赴任しました（最近では同窓会でも北大との連携行事も多く嬉しく思っています）。担当科目は「世界経済」です。赴任以来の学部のゼミ生も13期目になります。修士・博士の院生、博士課程を終えた助教（以前の助手）も抱えています。留学生も中国、韓国、インドネシアなどからの留学生や、現在はキルギスタンからの国費留学生も受け持っています。学部のゼミは人数も多くなり、以前のように研究室ではなく講義棟で行っています。学部のゼミの同窓会も開催しており今年5月に福岡にて開催しました。学部の卒業生や大学院の修了生でしばらく会っていない方、連絡下さい（shimizu@en.kyushu-u.ac.jp）。

研究に関しては、世界経済、東アジア経済を研究してきています。世界経済の構造変化の下でのASEAN（東南アジア諸国連合）や東アジアの地域経済協力を専門にしています。それらに関する論文や学会報告などとともに、学会や研究会などの主催も行っています。2001年からの福岡県・福岡市主催の福岡アジア国際会議でも、第1回から6回まで司会を務めています（東アジアの地域協力やFTA、産業などがテーマでした）。



著作としては、『ASEAN域内経済協力の政治経済学』（ミネルヴァ書房）他いくつかの著作を出してきています。今回ご紹介する編著は、最新のASEANに関する著作で、石川幸一・清水一史・助川成也編著『ASEAN経済共同体—東アジア統合の核となりうるか—』日本貿易振興機構（JETRO）、2009年刊行です。以下、紹介させていただきます。

ASEANは、世界経済の構造変化のもとでASEAN自由貿易地域（AFTA）を確立し、更に2015年までにASEAN経済共同体（AEC）の実現を目指しています。1967年に設立されたASEANは、従来東アジア唯一の地域協力機構であり、東アジアの地域協力の代表となってきました。参加国も設立時のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイの5カ国からブルネイ、ラオス、ミャンマー、カンボジアを加えて10カ国となり、東南アジア全域を領域としています。またASEAN+日本・中国・韓国（ASEAN+3）などの東アジアの地域協力や自由貿易協定においても、中心となっています。

2015年に完成を目指しているASEAN共同体は、政治・安全保障共同体、経済共同体、社会文化共同体の3つから構成され、その中心がASEAN経済共同体（AEC）です。AECは、財・サービス・資本・熟練労働力の自由な移動に特徴付けられる単一市場・生産基地を構築する構想です。AEC実現を支える制度面でも、2009年に「ASEAN憲章」が発効しました。共同体への試みは、東アジアにおいては画期的です。

本書は、2008-2009年の日本貿易振興機構における共同研究の成果でもあり、ASEAN経済共同体（AEC）とは何かを明らかにし、その意義、課題、影響を検討しています。ASEAN事務局から発表された多くの関係文書と先行研究をベースとした上で、多くの現地調査を基にまとめられています。

本書は3部から構成され、第1部（ASEAN経済共同体への意義と実現への道程：序論～第2章）は総論であり、ASEAN統合を世界経済の中で位置付けるとともに、ASEAN共同体をブループリントから描き出し、ASEAN憲章の意義を検討しています。私も序論（「世界経済の構造変化とASEAN経済統合」）と第2章（「ASEAN憲章の制定とAEC」）を執筆しております。第2部（ASEAN経済共同体実現のための取り組みと課題：第3章～第8章）では、経済共同体の要素である、関税撤廃、非関税障壁の撤廃、貿易円滑化、サービス貿易、投資、人の移動について、分析しています。第3部（各国のAEC



措置の取り組み状況と主要産業への影響：第9章～第13章）では、主要国における経済共同体創設に向けての動向と課題を議論しています。終章では、共同体へ向けての日本の協力に関してもまとめています。また本書は、スリンASEAN事務総長に「発刊によせて」を寄せて頂いております。

現在アジアでは中国とインドが台頭してきていますが、ASEANとASEAN諸国は依然として重要です。ASEANは協力・統合で先行し、また東アジアの地域協力の中心でもあります。日本企業も市場と生産基地としての蓄積があり、日本にとっても日本企業にとっても、ASEANは最も重要なパートナーの一つです。

現在の東アジアの地域経済協力・経済統合を考える上で必須の一冊と考えております。どうぞ一読下さい。尚、本書は以下のHPでも紹介されています。  
[http://books.jetro.go.jp/jpn/products/detail.php?product\\_id=458](http://books.jetro.go.jp/jpn/products/detail.php?product_id=458)

もちろん書店にも置いてあります。バンコクの紀伊国屋でも店頭で平積みになっております。

次の著作も準備しております。機会があればまた紹介させて頂きたいと思っております。

最後に同窓生の皆様、次回同窓会でお会い出来ますこと、大いに楽しみにしております。

## 経済学研究院教員一覧

平成22年9月1日現在

## 経済工学部門

## 経済システム解析講座：

三浦 功（教授、ミクロ経済分析）  
 藤田 敏之（准教授、経済モデル解析）  
 大住 圭介（教授、マクロ経済分析）  
 佐伯 親良（教授、計量経済学）  
 瀧本 太郎（准教授、マクロ数量分析）  
 荒川 章義（准教授、現代経済学）  
 関 源太郎（教授、現代経済思想）

## 政策分析講座：

中田 真佐男（准教授、財政分析）  
 木成 勇介（講師、現代金融）  
 浦川 邦夫（准教授、福祉政策）  
 内田 交謹（准教授、企業経済分析）  
 堀 宣昭（准教授、産業組織）  
 磯谷 明德（教授、比較経済制度）

## 数理情報講座：

大西 俊郎（准教授、数理統計学）  
 小野 廣隆（准教授、数理計画）  
 松本 浩一（准教授、確率モデル解析）  
 時永 祥三（教授、情報管理）  
 古川 哲也（教授、情報解析）

## 産業・企業システム部門

## 産業システム講座：

実積 寿也（教授、産業政策）  
 久野 国夫（教授、産業技術）  
 山本 健兒（教授、産業配置）  
 堀井 伸浩（准教授、産業構造）  
 鷲崎 俊太郎（准教授、日本経済史）  
 北澤 満（准教授、産業社会史）

## 経営システム講座：

久原 正治（教授、経営政策）  
 塩次 喜代明（教授、企業管理）  
 遠藤 雄二（准教授、経営労務）  
 儲 梅芬（講師、留学生担当）

## 会計システム講座：

大下 丈平（教授、原価計算）  
 丸田 起大（准教授、管理会計）  
 大石 桂一（准教授、企業会計）

## 国際経済経営部門

## 国際経済分析講座：

清水 一史（教授、世界経済）  
 川波 洋一（教授、国際金融）  
 岩田 健治（教授、比較金融システム）  
 八木 信一（准教授、比較地域政策）  
 大坂 仁（教授、開発経済）  
 深川 博史（教授、国際農業政策）  
 加河 茂美（准教授、経済統計）  
 藤井 美男（教授、西洋経済史）  
 田北 廣道（教授、市場経済史）

## 国際企業分析講座：

篠崎 彰彦（教授、国際企業経済）  
 小津 稚加子（准教授、国際会計）  
 角ヶ谷 典幸（准教授、比較会計制度）  
 石田 修（准教授、貿易投資分析）  
 稲富 信博（教授、国際資本市場分析）

## 産業マネジメント部門

## 産業マネジメント講座：

出頭 則行（教授、マーケティング戦略）  
 村藤 功（教授、企業財務）  
 平松 拓（教授、ファイナンシャル・マネジメント）  
 岩崎 勇（教授、タックス・マネジメント）  
 永田 晃也（准教授、イノベーション・マネジメント）  
 高田 仁（准教授、産学連携マネジメント）  
 吉田 基樹（教授、知的財産管理）  
 朱 穎（准教授、アジアの産業と企業）  
 中村 裕昭（教授、国際企業分析）  
 星野 裕志（教授、国際ロジスティクス）

# 経済学部名誉教授の会

今年も4月3日(土)に第14回の「経済学部名誉教授の会」の集いが、日赤病院前の「さかえ鮨」で開催されました。16名の名誉教授と川波洋一研究院長の計17名が集いました。

最高齢の木下悦二先生が89歳、秀村選三先生87歳、大屋祐雪先生84歳、市村昭三先生81歳、川端久夫先生・深町郁彌先生・原田實先生・津守常弘先生80歳と傘寿を超えられた8名の先生方も元気に参加されました。

川波研究院長から経済学部・経済学府の活動について伺い、その後は16名各々の近況報告—健康論・旧友論・九大跡地論・研究計画論・趣味論など多彩—で、2時間半の春の宵も瞬く間に過ぎ去りました。秀村先生の提案で、1968年からの「大学紛争」の記

録を残すことが決議され、1年後の再会を期して散会致しました。(福留・記)



後列右から三人目、川波洋一院長を挟んで、右から丑山優・近昭夫・濱砂敬郎・荻野喜弘・逢坂充・原田溥・児玉正憲・津守常弘・福留久大の各名誉教授  
前列右より、市村昭三・川端久夫・秀村選三・木下悦二・大屋祐雪・深町郁彌・原田實の各名誉教授

## 人物往来 ~ 新教員紹介



**永田 晃也** 准教授 51歳

**【担当講義】**

経済学府産業マネジメント専攻  
「イノベーション・マネジメント」「知識マネジメント」

**【略 歴】**

- 1983年 早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了
- 1992年 科学技術庁科学技術政策研究所研究員(1995年 同主任研究官)
- 1998年 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科助教授
- 2004年 九州大学大学院経済学研究院助教授(2007年 准教授に職名変更)

- 2008年 文部科学省科学技術政策研究所総括主任研究官
- 2010年 九州大学大学院経済学研究院に帰任

**【自己紹介】**

2008年度から2年間の交流人事により、文部科学省科学技術政策研究所にて研究グループの総括に当たる機会を頂き、本年4月に帰任いたしました。科学技術政策研究所では、第3期科学技術基本計画のフォローアップ調査の一環として実施された大学の国際的な比較研究プロジェクトを担当する他、科学技術・学術政策局から移管された承認統計調査である「民間企業の研究活動に関する調査」の実施体制の構築に携わってきました。これらの調査を通じて取得されたデータは、私が本学で担当する講義の中で活かしてまいりたいと考えています。今後とも宜しくお願いいたします。



**大西 俊郎** 准教授 39歳

**【担当講義】**

全学「微積分統論」  
学部「統計解析、数理統計学、経済工学演習」  
学府「数理統計学特研Ⅰ、Ⅱ」

**【略 歴】**

- 1993年 東京大学理学部卒業
- 1995年 東京大学理学系研究科退学
- 同年 住友海上火災保険株式会社入社(2000年3月まで)
- 2000年 筑波大学大学院経営・政策科学研究科修士
- 2002年 総合研究大学院大学数物科学研究科退学
- 同年 統計数理研究所助教(2010年3月まで)



2010年 九州大学大学院経済学研究院・准教授

### 【自己紹介】

2010年4月に経済学研究院に着任した大西俊郎と申します。前の所属は統計数理研究所（大学共同利用機関法人・情報システム研究機構）です。2002年から8年間勤務しました。

私の専門はBayes統計学と呼ばれる分野です。データから情報を抽出する方法論を研究するのが統計学ですが、Bayes統計学では事前情報とデータをうまく統合させて推測を行います。「普通の統計学」との違いは事前情報をうまく使うという点です。Bayes統計学の理論研究を行うとともに、応用研究として降水量などの環境データを解析しています。後者はサンシャインコースト大学（オーストラリア）との共同研究です。

私と統計学との出会いは12年前、1998年になります。当時、住友海上火災保険株式会社で保険数理業

務を担当するかたわら、筑波大学大学院修士課程で研究生活をスタートさせました。統計学をさらに深く追究することを決意し、2000年に修士課程を修了した後に総合研究大学院大学博士課程に進学しました。幸運にも博士課程の途中で統計数理研究所に助手として採用され、2003年に博士号を取得しました。

統計学の研究を行っていて強く感じるのが、物理学との共通性です。統計学と物理学は底流でつながっているように思います。東京大学・大学院時代（1991～1995年）に行っていた物理の研究が現在でも役立っています。私の研究の原動力になっているといっても過言ではありません。

前所属では研究中心でしたが、本研究院では教育にも注力したいと考えています。担当している講義は、数理統計学、統計解析および数理統計学特別研究です。統一的な視点に立った理論の理解および実際の問題への自在な適用を可能にするような統計教育を行いたいと思っています。



**小野 廣隆** 准教授 37歳

### 【担当講義】

学部「数理計画」  
学府「応用数理Ⅱ」

### 【略 歴】

1997年 京都大学工学部 卒業  
2000年 日本学術振興会特別研究員（DC2）（2002年まで）  
2002年 京都大学大学院情報学研究科博士課程修了・学位取得 博士（情報学）  
同年 九州大学大学院システム情報科学研究院 助手（2007年より助教、2010年8月まで）  
2010年 King's College London, Visiting Senior Research Fellow（2010年2月から9月まで）  
同年 九州大学大学院経済学研究院・准教授

### 【自己紹介】

数理計画の担当としてこの9月1日からお世話になることになりました小野と申します。お題として「九大新任にあたり」をいただいたのですが、実のところ私は2002年の春以来、九州大学でお世話になっており、その勢いで京都出身にもかかわらず2005年から博多祇園山笠にも参加するなど、九州・福岡での生活を楽しませていただいております。

私は京都大学の工学（情報学）研究科の数理工学専攻を修了し、九州大学のシステム情報科学研究院の助手（現助教職）に着任しました。私が学生時代所属していた研究室はオペレーションズ・リサーチを専門としており、私はそこで最適化（数理計画法）をデータ解析に適用する研究で学位をいただきました。

システム情報での採用は、計算機科学で現れる諸問題を「最適化」することを期待されてのものでしたが、今回、こちら経済学研究院・経済工学部門で採用していただくこととなったのは経済における諸問題を「最適化」する、もしくは「最適化」「計算」の視点から切り込むことを期待されてのものだと思っております。

少し話が飛びますが、私はこの8月31日まで在外研究でロンドンに7ヶ月滞在しておりました。私の受け入れ先はKing's College Londonの数理・計算機科学部門（情報学）でしたが、経済学で有名なLSE（London School of Economics and Political Science）とは地理的にも交流的にも近く、ゲーム理論などに関するセミナーを共同で行ったりもしていました。これは良い機会と何度か参加をしましたが、経済学と情報学の距離の近さを改めて認識できたのと同時に、私のこれからの研究の方向性に色々ヒントを貰ったような気がしています。

皆様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



**儲 梅芬** 講師

**【担当講義】**

学部 外国語講読（日本語経済）

学府 日本語経済特研Ⅱ

**【略 歴】**

- 1987年 上海財経大学世界経済学部国際金融専攻卒業 中国銀行入行
- 2000年 九州大学数理学府数理学研究科修士課程入学
- 2002年 九州大学数理学府数理学研究科修士課程修了
- 2005年 九州大学経済学府経済工学専攻博士課程入学
- 2008年 九州大学経済学府経済工学専攻博士課程修了
- 2008年 九州大学大学院経済学研究院学術特定研究員（国際交流担当）
- 2009年 九州大学大学院経済学研究院テクニカルスタッフ（国際交流担当）
- 2010年 九州大学大学院経済学研究院留学生担当講師

**【自己紹介】**

4月に留学生担当講師として着任致しました儲梅芬（Chu Meifen）と申します。出身は中国の上海市です。上海財経大学を卒業後、中国銀行で国際業務に携わってきました。日本に来てから、人生は大

きく変わりました。これまで実社会の仕事を歩んできた私でしたが、学問に対する好奇心が再び湧いてきて、高校・大学時代に得意だった数学を用いて、経済分析に活用しようと思うようになり、2000年に、九州大学数理学科数理学専攻に入学致しました。これは私の研究生活のスタートです。修士終了後、一時的に海外渡航しましたが、帰国後、九州大学経済学府経済工学専攻博士課程へ進学し、充実した研究の日々を送ることができました。

博士学位取得後2年ほど経済学部の国際交流の仕事に従事しましたが、大学教員になるのは初めてです。ととても緊張しました。しかし、周りの方々に助けて頂き、無事にスタートすることができました。

日頃は、色々な国から来た留学生と出会って、異文化の交流を体験しています。交流や会話の中、色々な相談も受けております。学生と一緒に笑ったり、泣いたりして、教員と学生の関係を越えて、友達のような関係でコミュニケーションするようになっており、毎日楽しく過ごしております。

留学生の担当講師として、常に責任感を重く感じますが、キャンパスでよく留学生の笑顔を見かけると、大変やり甲斐のある仕事であると実感します。これから、一所懸命頑張りますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



**木成 勇介** 講師 31歳

**【担当講義】**

学部：金融

学府：現代金融特研

**【略 歴】**

- 2003年 大阪大学経済学部卒業
- 2008年 大阪大学博士後期課程修了（経済学博士）
- 2008年 名古屋商科大学経済学部講師
- 2010年 九州大学大学院経済学研究院講師

**【自己紹介】**

今年度4月より経済工学部門・政策分析講座に着任いたしました木成勇介と申します。出身は京都市ですが、大阪大学経済学部入学以降は大阪大学近辺に9年間住んでおりました。その後、名古屋商科大学で2年間、経済学部講師として教育・研究に携わ

ておりました。

九州大学に着任して最も驚いたことは、学生たちの勉強意欲の高さです。試験前でもないのに、講義終了時には多くの学生たちが講義内容について、教科書の内容について、自身の研究論文について、また資格試験について質問にきます。中には非常に高度な質問や答えにくい質問も含まれており、自身の理解の拙さ、説明する能力の拙さを思い知らせてくれます。このような学生たちの質問に応えるためにはより一層の努力が必要であると日々感じております。

九州大学の充実した研究環境、勉強意欲の高い学生たち、そして暖かく接して頂ける教職員の方々のおかげで、九州大学での生活、また福岡県での生活という新しい環境にもすぐに慣れることができました。まだまだ未熟者で皆様には大変なご迷惑をかけることと思いますが、教育・研究に精いっぱい励んでまいります。これまで通り、暖かく見守って頂けると幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 九州大学経済学部 国際学術交流振興基金執行状況報告（平成21年度）

経済学部創立60周年を記念し、かつて同窓会を中心に御寄付頂いた資金は、「国際学術交流振興基金」として活用させて頂いております。毎年のさまざまな国際学術交流のなかで平成21年度は下記内容にて同基金を執行しました。御寄付頂いた同窓会の方々に改めてお礼申し上げますとともに、ここに御報告いたします。

最近の国際学術交流の特徴は、アジア指向と交流協定です。九州大学では教育・研究目標に、アジア指向や国際交流強化が設定され、経済部局の運営も、海外の協定締結校との交流推進など、設定目標に到達すべく進められるようになりました。そのような状況の中で本基金は、アジアの協定校との国際カンファレンス開催などにも活用されています。今後は、従来の国際交流に加えて、新たな国際交流のヴィジョンのもとで戦略的な運用にも努めて参ります。

同窓会の会員の皆様へは、従来の御協力に感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御支援を経済学部に賜りますようお願い申し上げます。

【国際交流委員会委員長 **大住 圭介**（経済学研究院教授）】

申 請 者	内 容	期 間
吉田 基樹 (教授)	※研究集会への参加 28th International Conference on Ocean Offshore and Arctic Engineering (OMAEE 2008) において物流の定時性と経済性に関する議論を行う。	21.5.30～21.6.7
ジャワラ・バラス Diawara Barassou (大学院生)	※研究集会への参加 Singapore Economic Review Conference (SERC) 2009において「教育と仕事の複雑性 (Job Complexity)」について研究発表を行う。	21.8.5～21.8.9
ファルケ・セルバン テス・エドアルド (大学院生)	※研究集会への参加 「Business and Economics Society International」の2010年国際学会で研究発表を行う。	22.1.6～22.1.9
三輪 宗弘 (教授)	※研究集会への参加 AAS Annual Meeting (米国アジア学会 全国大会, Association for Asian Studies) においてパネルで研究報告を行う。	22.3.24～22.3.29
実積 寿也 (教授)	※海外在住研究者の招聘 (国内からの招聘) 情報通信政策に関する専門家 (Wik-Consult GmbH 上級コンサルタント Kenneth R.Carter) を招いて、最新のEUの情報通信政策に関する研究会及びEUにおけるNGNの動向に関する講義を実施する。	21.10.4～21.10.6
藤井 美男 (教授)	※国際交流研究成果の発刊 (国際交流成果の刊行経費) 書 名: Leuven大学 (ベルギー王国) のErik AERTS 教授の講演会 (2009年4月開催) 記録	
堀江 康熙 (教授)	※国際交流研究成果の発刊 (外国語による学術書の発行経費) 書 名: The Japanese Regional Banks' Behavior: the Changing Environment over the Issues of Income Disparity and Aged Society	
Dai Jianzhong (戴 建中)	※指定校からの学府入学者への奨学金 経済学府博士後期課程・経済工学専攻	21.4.1～22.3.31
池 赫 (チ カク)	※指定校からの学府入学者への奨学金 経済学府修士課程・経済システム専攻	21.4.1～22.3.31



## 平成21年度卒業生就職状況

平成22年5月1日現在、( )は女子で内数

学 部	
就 職 先	人数( )
DIVA	1
JFEスチール	1
NTTデータ	2
RKKコンピューターサービス	1
SBIホールディングス	1
UR都市再生機構	1
アサヒビール	1 (1)
アビームコンサルティング	1
アフラック	1
エーザイ	1 (1)
エース証券	1
オークマ	1
麒麟ビール	1 (1)
コスモス薬品	1
ザイマックスビル マネジメント	1
ダイナム	1
チッソ	1
デル	1 (1)
デンソー	1
デンソー北九州製作所	1 (1)
トーマツコンサルティング	2
トヨタ自動車	2 (1)
トヨタ自動車九州	1 (1)
はせがわ	1
ブレインワークス	1 (1)
フロンティアワークス	1
みずほフィナンシャル グループ	2 (1)
メタルワン	1
ヤクルト	1
ゆうちょ銀行	3 (2)
りそな銀行	1
ワークスアプリ ケーションズ	4
旭化成	1 (1)
安川電機	3 (3)
伊藤ハム	1
伊藤忠商事	1
岡藤商事	1
宮崎銀行	1
九州テン	1
九州大学	1
九州電力	6 (1)
九州旅客鉄道	3
九州労働金庫	2
九電ビジネス ソリューションズ	1 (1)
広島銀行	1 (1)
広島県信用保証協会	1
黒崎播磨	1
三井化学	1

就 職 先	人数( )
三井住友海上	2 (1)
三井住友銀行	6
三井物産	1 (1)
三菱UFJリース	1 (1)
三菱重工業	2
三菱電機	3
三菱東京UFJ銀行	1 (1)
三陽商会	1 (1)
山口銀行	1
山崎製パン	1
鹿児島銀行	1 (1)
鹿島建設	1
住友金属工業	1
住友商事	1
十八銀行	1 (1)
商工組合中央金庫	2 (2)
小川香料	1
湘南ゼミナール	1
新日本空調	1
新日本製鐵	1 (1)
西京銀行	1
西日本シティ銀行	5 (1)
西日本鉄道	1 (1)
西日本電信電話	1
税理士事務所	1
税理士法人諸井会計	1
税理士法人平成会計社	1 (1)
川崎重工業	1
全国共済農業協同組合 連合会	1 (1)
損害保険ジャパン	2 (2)
大阪信用金庫	1
大成建設	1
大分銀行	1 (1)
大分放送	1
大和証券	1
竹中工務店	1
竹内総合会計	1
中央三井トラストグループ	1 (1)
中国電力	2
朝日ビジネス コンサルティング	1 (1)
電通九州	1
東京海上日動火災保険	1
東芝	4
東日本旅客鉄道	1
南日本銀行	1
日清紡ホールディングス	1
日本気象協会	1
日本銀行	2 (1)
日本原子力研究開発機構	1
日本航空	1
インターナショナル	1

就 職 先	人数( )
日本政策金融公庫	3 (1)
日本政策投資銀行	2
日本生命保険相互会社	2 (1)
日本通運	1 (1)
日本郵便	1 (1)
日立ソフトウェア エンジニアリング	1 (1)
日立製作所	3 (2)
農林中央金庫	2
富士通	1 (1)
福岡銀行	5 (1)
麻生	1
明治乳業	1
野村證券	1
悠香	1 (1)
朝倉市役所	1
有明工業高等専門学校	1 (1)
飯塚市役所	1 (1)
大分市役所	3 (2)
大野城市役所	1
岡山県庁	1
沖縄県庁	1
鹿児島県庁	1
九州経済産業局	2
九州財務局	1
熊本国税局	1
国税専門官	1 (1)
佐賀市役所	1
太宰府市役所	1
福岡県庁	3 (2)
福岡財務支局	1 (1)
福岡市役所	1
山口県庁	1
総計	185
修士課程(学府)	
就 職 先	人数( )
エレコム	1
カウン・システム・サービス	1
コカ・コーラウェスト	1
デザインニコー 一級建築士事務所	1
トーマツコンサルティング	1
パナソニックシステム ネットワークス	1 (1)
ヒサエダコンサルティング	1
ハウエイ	1
企業再生支援機構	1 (1)
近代プラント	1
九州経済産業局	1
九州歯科大学	1
九州大学	2 (2)
九州電力	2
九州旅客鉄道	3

就 職 先	人数( )
戸田建設	1
国立病院機構 九州医療センター	1
阪急阪神百貨店	1 (1)
三菱化学	1
三菱総研DCS	1 (1)
山九	1
住友電工	1
情報通信総合研究所	1
新日本非破壊検査	1
新日本有限責任監査法人	1
西日本シティ銀行	2
宣翔物産	1
大洋サンソ	1
東海リース	1
東邦システムサイエンス	1
日刊スポーツ新聞西日本	1
日興コーディアル証券	1
日本ハム	1 (1)
日本政策金融公庫	1 (1)
日本電産	1
飯盛教材	1
福岡銀行	1
平岡学園	1 (1)
北九州物流サービス	1 (1)
郵便局福岡監査室	1
経済産業省九州経済産業局	2
宗像市役所	1
飯塚市	1 (1)
福岡県	1
福岡市役所	1
総計	51

## 平成21年度決算報告

## 収支計算書 平成21年4月1日～平成22年3月31日

(単位:円)

収入の部	予算	決算	差異
会費収入	8,500,000	6,880,500	△ 1,619,500
(会員)	4,000,000	3,275,500	△ 724,500
(学生会員)	4,500,000	3,605,000	△ 895,000
負担金収入	920,000	918,000	△ 2,000
教員年間総会費	520,000	520,000	0
卒業祝賀会会費	400,000	398,000	△ 2,000
雑収入	204,000	151,033	△ 52,967
受取利息	200,000	143,433	△ 56,567
名簿売上	4,000	7,600	3,600
当年度収入計	9,624,000	7,949,533	△ 1,674,467

支出の部	予算	決算	差異
事業費	6,510,000	4,156,315	△ 2,353,685
会報発行費	2,700,000	2,031,120	△ 668,880
留学生奨学金	960,000	960,000	0
学術研究員支援寄付	1,500,000	0	△ 1,500,000
卒業祝賀会	1,300,000	1,165,195	△ 134,805
会員加入促進費	50,000	0	△ 50,000
運営費	6,350,000	6,424,321	74,321
事務局員費	1,500,000	1,500,000	0
会議費	50,000	42,620	△ 7,380
通信費	1,000,000	1,533,570	533,570
旅費交通費	1,800,000	990,000	△ 810,000
消耗品費	50,000	105,166	55,166
消耗雑費	100,000	152,965	52,965
支部運営費	1,850,000	2,100,000	250,000
負担金	250,000	240,000	△ 10,000
全学同窓会分担金	150,000	140,000	△ 10,000
支部総会会費(教員)	100,000	100,000	0
当年度支出計	13,110,000	10,820,636	△ 2,289,364

当年度収支差額	△ 3,486,000	△ 2,871,103	614,897
前年度繰越収支差額	1,273,589	1,273,589	0
正味会費納入金から繰入	3,000,000	2,000,000	△ 1,000,000
正味会費納入金へ繰入	0	0	0
次年度繰越収支差額	787,589	402,486	△ 385,103

## 貸借対照表 平成22年3月31日現在

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
現金預金	51,722,199	未払金	795,350
現金	36,137	前受金	2,240,000
普通預金(西日本シティ)	1,679,733	預り金	1,268,700
普通預金(西日本シティ2)	18,697	負債合計	4,304,050
普通預金(福岡)	204,397		
郵便貯金	1,237,238	正味会費納入金	48,515,663
郵便振替口座(通知)	1,571,038	前年度繰越高	50,515,663
定期預金(西日本シティ)	33,666,720	一般会計へ繰入	△ 2,000,000
定期預金(福岡)	13,308,239	一般会計から受入	0
前払金	1,500,000	次年度繰越収支差額	402,486
		正味財産合計	48,918,149
資産合計	53,222,199	負債・正味財産合計	53,222,199

## 経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。

本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学研究科・学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名

- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
- 3 役員の内任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
- 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。  
(2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。  
(3) 理事については別に規定する。  
(4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。  
(5) 監事は本会の会計を監査する。  
(6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。



- 2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
- 3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 通常総会では次の事項を承認する。
  - (1) 予算および決算に関する事項
  - (2) 役員を選任、会則の制定および変更に関する事項
  - (3) その他本会の運営に関する事項
- 3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

- 2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

#### ※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

#### ※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。

なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

#### 附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。

## 九州大学経済学部同窓会役員名簿

(カッコ内は卒業年次～昭和、ただしHは平成) 2010年9月

役 員 氏 名	長友 泰明 (33) 鈴木多加史 (33)
会 長 池田 弘一(38)	江口 傳(34修士) 真藤 乃輔(34)
副 会 長 石橋 英治(36) 貫 正義(43)	河原畑繁久(34) 小金丸哲夫(34) 森 重厚(34)
事務局長 久野国夫(院・52)	麻生喜久男(35) 進谷 庸助(35) 濱崎 泰行(35)
監 事 貞刈 厚仁(52) 工藤 重之(52)	三輪 晴治(35) 石橋 英治(36) 首藤 晃良(36)
顧 問 本田 精一(25) 大屋 祐雪(26)	種村 茂明(36) 山道 茂樹(36) 田口 廣則(37)
深町 郁彌(29) 淵上 敏晴(29)	佐野 壬彦(38) 渡辺 昌則(38) 黒岩 宏行(39)
福岡 道生(30) 松浦 正純(30)	犬山 俊昭(40) 檀 豊隆(40) 出口 敏明(40)
森山 靖章(30) 逢坂 充(32)	松浦 哲也(40) 沖 弘隆(41) 安陪 義宏(42)
鈴木多加史(33) 有吉 孝一(34)	平本 公雄(42) 右田 喜章(42) 杉 哲男(43)
荒木 千寿(35) 進谷 庸助(35)	寺原 義之(43) 貫 正義(43) 跡部 千春(44)
檀 豊隆(40)	一丸 孝憲(44) 甲斐 琢己(44) 鶴川 洋(45)
(理 事)	森 恍次郎(45) 青柳 泰教(46) 太田 光一(46)
本 部 池田弘一会長 久野国夫事務局長	鍛治 康博(46) 小森田憲繁(46) 橋本 純夫(47)
川波洋一研究院長 丑山優名誉教授	吉井 勝敏(48) 岩崎 俊彦(49) 久保 隆二(49)
深川博史教授 大石桂一准教授	園田 一蔵(49) 加藤 孝典(50) 佐藤 敏弘(50)
大 学 関源太郎教授 清水一史教授	中野 光男(50) 石田 光明(51) 古賀 英樹(51)
東京支部 池田弘一支部長 杉哲男副支部長	光富 彰(51) 貞刈 厚仁(52) 工藤 重之(52)
淵上敏晴顧問 吉元利行事務局長	志村 恭子(52) 岡田 裕二(53) 境 正義(53)
関西支部 石橋英治支部長 小森田憲繁副支部長	長竹 正隆(53) 綾部 正博(53) 吉元 利行(53)
久保隆二副支部長 中野光男事務局長	小川 重巳(54) 小林 真幸(54) 嶋田 正明(54)
福岡支部 貫正義支部長 鶴川洋副支部長	三浦 正(54) 平井 彰(55) 池上 恭子(56)
吉井勝敏副支部長 光富彰副支部長	窪田 秀樹(56) 富山 幸三(56) 米村 健史(56)
平井彰事務局長	楠 雅之(57) 川上 寛(58) 木村 博(58)
(評議員)	柴田 祐二 (59) 齊藤久美子(62修士)
西川 宏(21) 秀村 選三(22) 井上喜三郎(23)	友池 精孝(59) 吉留 郁(59) 齊藤 浩志(60)
福田洋之助(23) 富田 敏郎(23) 大屋 祐雪(26)	田中 和教(61) 成宮 正和(61) 桜木 良平(62)
滝口 凡夫(26) 棚倉 亨(27) 江藤 正憲(27)	下村 優子(62) 高本 英一(62) 岩中 雄次(63)
井原 伸允(28) 石松 順禧(29) 兼尾 雅人(29)	大坪 勇二(63) 古川 和哉(H1) 清丸 泰司(H2)
深町 郁彌(29) 淵上 敏晴(29) 山下 正迪(29)	山崎 正良(H2) 谷村 信彦(H3) 北村 英照(H3)
山本 和良(29) 岩本 桂(30) 富澤 義敬(30)	林 秀信(H3) 尾花 研(H4) 中村 昌子(H4)
松尾 和彦(30) 松浦 正純(30) 村上 明夫(30)	松延 篤(H4) 原山 泰之(H5) 三浦 芳徳(H5)
森山 靖章(30) 大田 孝生(31) 濱口 廣海(31)	山崎 浩(H7) 上田 純也(H8修士)
吉田 正美(31) 下川 浩一(32) 山本 兼茂(32)	竹下 将史(H8) 松本 康孝(H9)
	久保 文一(H11修士) 濱田 貴将(H12)

今川 紗織(H14) 甲斐 智子(H15)  
 香川 浄美(H16) 松元 恵美(H16)  
 市村 昭三(元教官) 清水 一史(現教員)

山道 茂樹(36) 松浦 哲也(40)  
 跡部 千春(44) 甲斐 琢己(44)  
 佐藤 敏弘(50) 古賀 英基(53)  
 富山 幸三(56) 片山 基之(57)  
 川上 寛(58) 齊藤 浩志(60)  
 齋藤久美子(62修士)

## 各支部の役員

### 東京支部.....

**支 部 長** 池田 弘一(38)  
**副支部長** 下川 浩一(32) 杉 哲男(43)  
**顧 問** 淵上 敏晴(29) 福岡 道生(30)  
 荒木 千寿(35)  
**監 事** 森 重厚(34) 橋本 純夫(47)  
**理 事** 高岩 淡(29) 三輪 晴治(35)  
 西山 和宏(36) 種村 茂明(36)  
 箱島 信一(37) 鍛冶 康博(46)  
 富井 順三(50) 小林 真幸(54)  
 下村 優子(62) 岩中 雄次(63)  
 瀧谷 善太(H10) 濱田 貴将(H12)  
 今川 紗織(H14) 三角 佳奈(H15)  
 甲斐 智子(H15) 香川 浄美(H16)  
 松元 恵美(H16) 亀井 祐輔(H20)  
 日下部清香(H20) 伊藤 健司(H21)

**事務局長** 吉元 利行(53)

**事務局次長** 大坪 勇二(63) 林 秀信(H3)  
 原山 泰之(H5)

### 関西支部.....

**支 部 長** 石橋 英治(36)  
**副支部長** 小森田憲繁(46) 久保 隆二(49)  
**顧 問** 松浦 正純(30) 鈴木多加史(33)  
 佐野 壬彦(38) 檀 豊隆(40)  
**事務局長** 中野 光男(50)  
**事務局長代理** 清丸 泰司(H2) 権藤 健太(H4)  
**会 計** 園田 一蔵(49)  
**監 事** 松浦 正純(30) 太田 光一(46)

\* 以上の方は、理事を兼任。

**理 事** 棚倉 亨(27) 江藤 正憲(27)  
 濱口 廣海(31) 河原畑繁久(34)

### 福岡支部.....

**支 部 長** 貫 正義(43)  
**副支部長** 鶴川 洋(45) 吉井 勝敏(48)  
 光富 彰(51)

**事務局長** 平井 彰(55)

**監 事** 森 恍次郎(45) 三浦 正(54)

**評 議 員** (\*は運営委員)

秀村 選三(22) 大屋 祐雪(26)  
 井原 伸允(28) 石松 順禧(29)  
 深町 郁彌(29) 山下 正迪(29)  
 山本 和良(29) 松尾 和彦(30)  
 森山 靖章(30) 江口 傳(34修士)  
 長友 泰明(33) 真藤 乃輔(34)  
 麻生喜久男(35) 進谷 庸助(35)  
 沖 弘隆(41) 安陪 義宏(42)  
 平本 公雄(42) 右田 喜章(42)  
 貫 正義(43) 寺原 義之(43)  
 一丸 孝憲(44) 鶴川 洋(45)  
 森 恍次郎(45) 青柳 泰教(46)  
 吉井 勝敏(48) 岩崎 俊彦(49)  
 加藤 孝典(50) 石田 光明(51)  
 古賀 英樹(51) 光富 彰(51)  
 貞刈 厚仁(52) 工藤 重之(52)  
 志村 恭子(52) 岡田 裕二(53)  
 境 正義(53) 長竹 正隆(53)  
 綾部 正博(53) 小川 重巳(54)  
 \*嶋田 正明(54) \*三浦 正(54)



*平井 彰(55)	池上 恭子(56)	*三浦 芳徳(H5)	山崎 浩(H7)
窪田 秀樹(56)	米村 健史(56)	*竹下 将史(H8)	手嶋 秀幸(H8)
楠 雅之(57)	柴田 祐二(59)	渡辺 正司(H8)	
友池 精孝(59)	吉留 郁(59)	*久保 文一(H11修士)	
*田中 和教(61)	成宮 正和(61)	名古屋地区連絡先	板山 和弘(54)
桜木 良平(62)	*高本 英一(62)	広島地区連絡先	佐藤 敬(23)
古川 和哉(H1)	*山崎 正良(H2)		白石 順一(34)
尾花 研(H4)	中村 昌子(H4)	大分地区連絡先	高山泰四郎(39)
池田 泉(H5)	宇出 研(H5)		

## 九州大学経済学部同窓会歴代会長

初代	田中 定氏	(昭和50年10月4日～)(3期8年)
第2代	森下 弘氏	(昭和58年2月4日～)(1期3年)
第3代	岡野 正實氏	(昭和61年10月24日～)(2期6年)
第4代	谷川 大介氏	(平成4年10月9日～)(1期1年)
第5代	渡邊 彦士氏	(平成5年7月7日～)(1期3年)
第6代	福岡 道生氏	(平成8年10月11日～)(1期3年)
第7代	吉田 清治氏	(平成12年2月10日～)(1期2年)
第8代	森山 靖章氏	(平成14年5月31日～)(1期3年)
第9代	平山 良明氏	(平成17年7月7日～)(1期3年)
第10代	池田 弘一氏	(平成20年7月7日～)

## 同窓会費納入のお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。御都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回(15年間で納入完了)
③	6分割	7,500円×6回(3年間で納入完了)
④普通会費	3年間分	4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了)

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割(会員様本人からの2～5回のお申し出で)、または一括払いで払い込まれた場合にも、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成22年9月30日現在で集計しました。